明日に生きる

―作文コンクール入選作品集―

第21号

平成22年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

人によって興味をもつものは違いますが、やりがいのある仕事を続けていければ幸せだろうな、と思って描いた絵です。自分の中で出来ないと決めつけずに、チャレンジすることも大切なことだと思います。

練馬区立豊玉第二中学校
2年　迫田（さこた）　奏（かな）

明日に生きる

第二十一号

―作文コンクール入選作品集―

明日に生きる　第二十一号　―　作文コンクール入選作品集　―　目　次

講　評

選考を終えて　高等学校・専修学校の部　選考委員長（東京都立江東商業高等学校長）　金城和貞　1
体験を今後に生かして　中学校の部　選考委員長（昭島市立清泉中学校長）　小谷野茂美　2
表彰式の記念写真

中学校の部

				ページ
最優秀賞	誰かのために作る	新宿区立西戸山中学校	三年　吉元雅喜	5
優秀賞	働くということ	愛国中学校	二年　横尾海香	7
優秀賞	職業体験を終えて	大田区立馬込中学校	三年　山岸　陸	8
優秀賞	ものづくりと人、そして、未来へ	北区立十条富士見中学校	二年　鈴木紫央里	10
優秀賞	ミニベンチを製作して	北区立十条富士見中学校	三年　石曽根斐子	12
佳作	将来の夢	愛国中学校	三年　中野志保	14
佳作	ものを生かす	港区立高松中学校	三年　小谷拳乙	15
佳作	学習した過去と未来への展望	新宿区立西戸山中学校	三年　西　忍	17
佳作	身の回りの技術と将来	新宿区立西戸山中学校	三年　明石和謙	18
佳作	仕事への価値観	新宿区立西戸山中学校	二年　蒔田博文	20
佳作	家事	文京区立第六中学校	三年　水野峻介	21
佳作	私の目標	墨田区立両国中学校	三年　阿部桃子	22
佳作	体験で見つけたこと	品川区立小中一貫校日野学園	二年　廣井花歌	23
佳作	職場体験を終えて	大田区立大森第一中学校	二年　千枝由美子	25

佳作　実際にやらなくてはわからないこと　大田区立大森第一中学校　二年　小林亜美　26
佳作　職業体験を終えて　大田区立馬込中学校　三年　重野茜　28
佳作　職業体験　大田区立馬込中学校　三年　木内龍之介　30
佳作　職場体験　大田区立馬込中学校　三年　中宮健吾　32
佳作　社会の厳しさ　練馬区立三原台中学校　三年　鈴木拓真　33
佳作　今、職場体験をふり返って考えた事　練馬区立三原台中学校　三年　柿﨑亮太朗　34
佳作　私の将来の夢　足立区立第六中学校　三年　渡邉美幸　36
佳作　保育体験　足立区立第七中学校　三年　齊藤未来　38
佳作　日陰の翳（のみ）　江戸川区立鹿骨中学校　三年　眞利子雅貴　39

高等学校の部

最優秀賞　一生ものの免許　愛国高等学校　衛生看護科　三年　矢作彩香　41
優秀賞　精神看護実習　愛国高等学校　衛生看護科　三年　田中みのり　42
優秀賞　実習で学んだこと　愛国高等学校　衛生看護科　三年　渡辺三紗　44
優秀賞　経験を生かして　蒲田女子高等学校　一年　辻明日香　46
佳作　社会福祉士になりたい理由　蒲田女子高等学校　一年　吉野美紀　48
佳作　私の生きがい　蒲田女子高等学校　三年　田中史織　49
佳作　誰かのための私、私のための誰か　岩倉高等学校　商業科　三年　沼野翔　50
佳作　夢を実現した私を目指して　岩倉高等学校　機械科　三年　清宮匠　52
佳作　「デザインする」ということ　東京都立忍岡高等学校　生活科学科　三年　小林愛奈　53
佳作　将来の夢　東京都立農産高等学校　園芸デザイン科　三年　鈴木博也　54
佳作　父の姿から学ぶ　東京都立農産高等学校　食品科　二年　吉川大輝　56

ページ

佳　作　ヒトは動物の身を育て、動物はヒトの心を育てる　東京都立瑞穂農芸高等学校　畜産科学科　二年　迎　沙梨葵　57
佳　作　調理実習で気付いたこと　東京都立農業高等学校　食物科　二年　田湯　由華　59
佳　作　一つの野菜から学んだ多くのモノ　東京都立農業高等学校　食品科学科　二年　西久保　恭平　60
佳　作　ものづくりを通して学んだこと　東京都立中野工業高等学校（定時制）　総合技術科　四年　滝口　貴大　62
佳　作　学校生活で学んだこと　東京都立中野工業高等学校（定時制）　総合技術科　四年　稲江　紀子　63
佳　作　「私の将来の夢」　東京都立江東商業高等学校　総合ビジネス科　一年　横山　夏澄　65
佳　作　マーケティング実践　東京都立江東商業高等学校　総合ビジネス科　一年　海老　真由香　66
佳　作　商業高校に入学して　東京都立江東商業高等学校　総合ビジネス科　一年　中村　帆七海　68
佳　作　念願の全国大会出場　東京都立第五商業高等学校　商業科　一年　佐竹　美鈴　70

専修学校の部　ページ

優秀賞　人生観を変えたボランティア活動　ホスピタリティツーリズム専門学校　エアライン学科　二年　笹野　愛紗　73
優秀賞　成長、そして、未来へ　ホスピタリティツーリズム専門学校　エアポートカーゴ学科　二年　金　東賢　74
佳　作　私の職業観　中央工学校　3D・CAD科　一年　稲川　和夫　75

応募校等一覧表
作文コンクール選考委員名簿
あとがき

選考を終えて

高等学校・専修学校の部　選考委員長
金城和貞

平成二十二年度の作文コンクールの作文選考に当たって、高等学校・専修学校の部を十三人の選考委員で担当いたしました。代表して講評をいたします。

今年度は、高等学校の部は十九の学校から、昨年度より三十編多い百二十六編の応募があり、専修学校の部は、昨年度より十編多い十九編の応募が四校からありました。その中から、高等学校の部は二十編、専修学校の部は三編を入賞作文として選びました。

選考に当たっては、題材やその内容、文章の構成などを総合的に評価しました。どの作文も自らの経験を元に書かれていて内容はみな素晴らしいものでした。その中でも今回選ばれた入選作文は特にレベルが高いものばかりといえます

さて、最近は若者の読書量の減少、いわゆる活字離れの問題や、国語力や文章力の低下が何かと話題になっています。確かに、携帯電話の普及により意思伝達方法に変化が起きています。本来、書き言葉は話し言葉と違って後に残るものなので、自分の考えや意思を文章にして相手に伝えることが大事ですが、電子メールの普及により、話し言葉や絵文字などを使った感覚的な「ことば」でしか意思伝達をできないなどの問題点が指摘されています。

このような状況だからこそ、自分の考えや様々な出来事をきちんと相手に伝えるための文章を書くことがより重要になってきていると思います。今回応募された作文については、文章として相手に伝えることのできる、全体的にたいへん素晴らしい出来栄えのものばかりでした。

その中でも、今回最優秀賞に選ばれた愛国高等学校の矢作さんの「一生ものの免許」は、実習時の体験を通して、悩みそして解決していく自分の気持ちを素直に表現した秀逸な作文でした。表彰式での作文朗読では、会場内の全員が感銘を受けました。

さて、今回選考にあたった委員のコメントからは、「入選作文はどれも人に伝えるための言葉のあり方を感じた」、「内容や構成、表現が良い」、「文章が素晴らしい」、「専門教育や体験を通した生徒の生き様を感ずることができた」などが多数ありました。その反面、一部の応募作品に対しては、「体験の報告だけであった」、「評論的になり自分の気持ちや考えがうまく表現できていない」、「体験を通しての夢や抱負を書き込んで欲しかった」、「漢字で書くべき語は漢字で書く。誤字・脱字に気をつける」などの指摘もありました。

いずれにせよ、委員一同作文を通して多くのみなさんの体験や苦労、学んだこと、将来の夢にふれることができ、たいへんうれしく思っております。多くの方々にもこの入選作品集をお読みいただき、生徒のみなさんの夢や希望に触れていただきたいと思います。ありがとうございました。

講　評

体験を今後に生かして

中学校の部　選考委員長
小谷野　茂美

本年度の中学校の部には、東京都内の公立・私立合わせて、三四校一四二作品が集まりました。作文審査に当たりましては、およそ次の点を中心に検討いたしました。

まず、①作文の内容や題材が産業作文コンクールの趣旨に十分合致しているか。②作文の構成が適切で、表現したいことが読み手に十分伝わってくるか。③中学生の発達に即して言葉を適切に活用しているか。などです。一四二作品のどれもが力作であり、審査には時間を要しましたが、いずれの作品も書き手の個性がよく表されていたと思います。

具体的には次のようにまとめられます。①技術・家庭科の学習を通して体験し感じた内容の作文も、職場体験やボランティアなどの体験から学んだ人生観や職業観を綴った作文も、体験の事実から自分はどのように感じ、今後どのように生かしたいか（または努力したいか）など、自分の意志を自分の言葉で表現している力強さが読み取れました。②自分の体験そのものは自分のものであっても、それは多くの人々に支えられていることを実感し、感謝の念を深くしていることが多くの作品にも表れていました。③自分の体験が、どれだけ心を豊かにはぐくむものであったかを、実感として受け止めている様子が感じられました。

どの作品も素晴らしかったのですが、ここでは、最優秀に輝いた西戸山中学校の吉元雅喜さんの作品の一部をご紹介しましょう。吉元さんは、技術・家庭科のお弁当コンクールに挑む過程で学んだことをまとめてくれました。相手のためにつくることを通して、相手に心を寄せることが作品（お弁当）作りの技量を深めていく学びの過程がよく表されていました。物作りの技術は、単に物を作ればよいというのではなく、使う人に心を寄せることで技術も進歩し人も豊かに潤うことが体得できた喜びを正直に綴っていたように思います。そしてそれは、世の中の有りようにまでも考えが及んでいく様子が読み取れ、学習体験が意義ある生き方体験として根付いていることを教えてくれました。

吉元さんだけでなく入賞された皆さんの価値ある体験が、これからの皆さんの生き方に良い影響を与えるであろうと思うと、とても清々しい気持ちになりました。

本コンクールの趣旨が、このような形で具現化され、参加された一人一人の生き方に少しでも意義あるものとなって定着していくことは、産業教育に関わる一人として、こんなに嬉しいことはありません。ご指導いただきました各学校の先生方、また体験を支えてくださいました保護者や事業所等の皆様に改めて感謝を申し上げますと共に、作品をお寄せいただきました生徒の皆さんの今後の活躍を期待し、選考のまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

平成 22 年度　作文コンクール表彰式（中学校の部）　12 月 17 日　　東京都産業教育振興会

中学校の部　最優秀賞

誰かのために作る

新宿区立西戸山中学校　三年
吉元雅喜

「人のために作る」

これが、この三年間の技術・家庭科の授業で僕が学んだことです。

一年生で作ったウサギのペン立てと本棚は、今も僕の机の上で活躍しています。整理整頓が苦手な僕の強い味方です。ファイルカバーは、家庭科の授業で配布されたプリントをはさんでいるファイルに使っています。これがあるおかげで僕のファイルは新品そのものです。二年生で作ったプログラムクロックは、毎朝僕を起こしてくれます。僕が学校に遅刻しないのは、七時にアラームが鳴るようにプログラムした、この目覚まし機能のおかげです。ギャルソンエプロンは、調理実習で活用しています。ポケットがたくさんついていて重宝しています。

これまで作ったものを振り返ると、すべて僕の生活にはなくてはならないもので、もし一つでも欠けてしまうと不便さを感じるような気がします。技術・家庭科の授業で作ったものすべてが、生活を豊かにしてくれるものです。ついこの間まで、僕はこのように感じていました。

その気持ちに変化が生じたのです。それは、家庭科の調理実習で、〝あなたのためのお弁当コンクール〟に参加することになったことがきっかけでした。

調理実習の班は、クラスで話し合った結果、くじびきで決めました。たまたま集まった三人で、誰のために作るのか考えたとき、「僕の弟のために作りたい。」と、一人が言い出したのです。

僕には兄弟がいません。家庭科の授業で家族について学習していても、それはあくまで知識でしかありません。実際の家族生活の中で、八歳の男の子がどんなことに興味があるのかは無知の状態でした。そんな僕が、友だちの弟のためにお弁当のコンセプトを考え、実際に作っていくことに、難しさを感じました。しかし、特に作ってあげたい対象がなかった僕は、友だちの提案に乗ることにしました。そうなると、友だちにいろいろ聞くしかありません。好きな食べ物、嫌いな食べ物、好きなキャラクター、色の好み…ありとあらゆることを聞きました。いろいろなことを教えてくれたおかげで、なかなかいいお弁当を作ることができたと思っています。

このお弁当コンクールに参加することを通して、誰かのためにものを作ることは、とても難しいことだと思いました。その対象となる人の好みや興味のあることなどを調べてから作らなければいけないからです。また、せっかく作るのだから、喜んでほしいと思うと、さらに難しくなります。失敗したものを渡してしまうと、相手はどう思うのか。絶対に失敗してはいけない。そんなことを考えてしまうからです。でも、それだけ相手のことを考えて作れば、自分のために作る「ものづくり」よりも、確実によいものができあがる気がします。

一年生の入学したばかりの僕たちに、技術の授業で、先生はポケットに入っている三つのものを見せてくれました。一つ目は、技術室のカギやドライバーなどの技術の授業で使う道具でした。二つ目は、僕たちの頑張りを評価し、それを書き留めておく記録用紙です。そして三つ目。先生は、右手を握って、「この手の平の中に入っているものを見たい人はいますか。」と言いました。僕たちは、身を乗り出して、その手の平をのぞき込みました。すると、そこには何も入っていなかったのです。がっかりした僕たちに、先生はこう話しました。「今、皆さんは『何が入っているんだろう』『中身を知りたいな』という気持ちを抱いたはずです。その気持ちが、技術の授業には大切です。それを〝好奇心〟と言います。これからの三年間の授業で、ぜひその気持ちを大切にしていってください。」あのときの僕は、先生が言っていることをあまり理解していませんでした。しかし、こうして三年間技術・家庭科の授業を受けてみると、先生の言いたかったことがよくわかります。教科書を読めば、素材・材料について、道具の使い方について、いろいろなことを学ぶことができます。しかし、これだけでは決していいものは作れないと思います。僕が友だちの弟のために、満足のいくお弁当を作ることができたのも、友だちの弟がどんな子なのか知りたいという好奇心があったからです。そして、それに基づいて行動したからです。失敗を繰り返しながら、自分たちが納得できるまであきらめなかったからだと思います。

世の中で行われている「ものづくり」は、すべて人のために行われているものです。今身につけている制服も、授業で使っている鉛筆や消しゴム、これらは使う人のことを考え、何度も改良を繰り返しながら商品化され、僕たちの手元に届きました。家庭生活の中でも自分のためにお弁当を作ることがあるかもしれないけど、今は母が僕のために作ってくれるものです。「人のために作る」という経験は、ものづくりの本質、世の中のしくみ、そして家族生活について考えるきっかけとなりました。このことを教えてくれた技術・家庭科の授業には、とても感謝しています。

中学校の部・最優秀賞の吉元雅喜さん

中学校の部　優秀賞

働くということ

愛国中学校二年
横尾海香

私の祖父と祖母はお店を営んでいます。私の父もそのお店で働いています。そのお店は私の大好きな和菓子やおにぎりを売っているお店で、家からも近かったので幼い頃、毎日のように行っていました。祖父はいつも頭に白いはちまきを巻いていて、とても声が大きく、お店にはそんな祖父の大きな声が響いていました。私がお店に行くと、忙しくても幼かった私を祖父や祖母は構ってくれました。お店が休みの日には、楽しい場所に遊びに連れて行ってくれる祖父、おいしい手料理を食べさせてくれる祖母。私はそんな優しい祖父と祖母が幼い頃から大好きでした。

しかし、小学校に入ってからは、友達と遊んだり、習い事に通ったりするようになり、お店に行くことは少なくなっていきました。そして、中学生になった今、お店に行くことはほとんどなくなりました。たまに習い事の帰りにお店に行ってみると、祖父と祖母は以前と変わらず「よく来たね、ありがとう。」と歓迎してくれます。また、帰るときには私の大好きな祖母の手料理を「また来てね。」と言って持たせてくれます。私はそんな時とても心が温まります。

しかし、先日祖父が突然の腹痛で病院に運ばれ手術をしました。私はその事を聞き急いで病院に行きました。手術は無事に成功しました。私は本当によかったとほっとしました。祖父は心臓が弱いので本当に心配でした。手術後の祖父はぐったりとしていてとても話しかけられる状態ではありませんでした。その光景はとても衝撃的でした。なぜなら、私はいつも元気で一生懸命に働いている祖父の姿しか見たことがなかったからです。それから私は、何度もお見舞いに行きました。私がお見舞いに行くと祖父はとても喜んでくれました。入院してから二週間ぐらいがたったある日、ずっと一人でお店を切り盛りしていた祖母と一緒にお見舞いに行ったとき、こんなことがありました。祖父が病室の棚から何枚もの紙を取り出し、祖母に「これをお店の皆に渡してくれ。」と言って渡したのです。それは、お店で働いているパートさん宛に書かれたメモでした。祖父はお店の商品を作っているそれぞれのパートさん方に、商品を作るときに気をつけなければいけない事を紙にびっしりと書いていたのです。祖父は自分の具合が悪くても毎日お店のことを心配していたのです。

そして、祖父が退院する日がやって来ました。その日私は学校が終わった後、真っ先にお店に行きました。するとそこには、いつもの白いはちまき姿の祖父がいました。私はとても嬉しかったです。心配そうな顔をしていた祖母も笑顔でした。その二人の姿を見て、私も自然と笑顔になりました。家に帰って、私は退院したばかりの祖父の様子を父から聞きました。なんと祖父はお店に戻ると、真っ先に倉庫に向かい倉庫整理をしていたそうです。私はそのことを聞いて、とても驚きました。そして、私の祖父はお店と、お客様をとても大

切にしているんだなということがわかりました。

祖父が退院して一週間くらいが過ぎたころ、お店に行ってみると、祖父の大きな声がお店いっぱいに響き渡っていました。そこで私は一人のパートさんに「あら、ずいぶんと大きくなったわねえ。」と、声をかけられました。初めは誰だかわからなかったのですが、声と顔を見てすぐに誰だかわかりました。そのパートさんは、父が中学生の頃から働いているお店で一番長くいる人でした。名前が辻本さんと言う名前なので、お店の皆からは、つじちゃんと呼ばれています。年齢は五十代後半で、私が幼い頃よく遊んでもらっていたパートさんでした。私は、しばらくお店で辻本さんの働いている様子を見ていました。すると、辻本さんは、とても動きがすばやくて、私でも、あんなにすばやく動くことはできないだろうなと思うくらい、祖父が頼んだ仕事をどんどんこなしていくのです。私は、その様子がとてもかっこよく見えました。その夜、父に辻本さんの話を聞きました。父は「辻本さんは人の何倍も働いてくれるから昔からすごく信頼されているんだよ。」と話してくれました。父の話によると、仕事が遅いと、他の人に迷惑をかけてしまうことになるそうです。父は私に、「仕事が遅いのは絶対に駄目だ。おまえも大人になって働くようになったら、辻本さんみたいにテキパキと働くんだぞ。」と言われました。

私は、今回祖父が入院したことと、辻本さんの話を聞いて、働くということについて考えさせられました。働くということは、そう簡単なことではないのだと思いました。お客様に喜んでもらえるよう、責任をもってどんなときも、変わらない努力を続けるということが、信頼につながるということがわかりました。祖父母のお店には、いつも買いに来てくれるお客さんが沢山います。祖父母の作った和菓子やお弁当を食べて喜んでくれる人がいます。私もお店に行くと癒され、幸せな気持ちになります。私は、いつも一生懸命に働いている人に感謝しないといけないとあらためて思いました。私も将来、働くようになったら、人に信頼されるような大人になりたいと思います。

職業体験を終えて

大田区立馬込中学校　三年

山岸　陸

僕は平成二十二年二月一日より、職業体験として「山王リハビリクリニック」の「リハビリテーション・デイケア」に行きました。名前だけではどのような仕事をするのかまったく想像がつかず不安なこともあり、正直に言うと気持ちが乗っていませんでした。

職業体験の一週間前に事前打ち合わせとしてはじめて職場に行きました。そのときは緊張のあまり職場の方による設備の説明やスタッフの方々の紹介もまったく頭に入りませんでした。そんな僕の様子にいち早く気づいてくださった職員の方は、ためになることから面白いことまで、さまざまな話をして下さり僕の緊張をやわらげてくださいました。僕は職員

の方のおかげで気持ちよく打ち合わせを終えることができ、実際の職場体験がとても楽しみに思えてきました。

打ち合わせで緊張がほぐれても、やはり当日になると心臓が飛び出しそうでした。「お客さんと話せるかな」「足手まといにならないかな」などといろいろ考えるうちに、職場へ向かう足が次第に重くなるのを感じました。職場についてみなさんにあいさつをしたあと、お客さんが来たときは緊張がピークに達し、その場に立っているだけで精一杯になりました。職場の方が気を遣ってくださり、話すきっかけをくれたのですが、話をしても弾むことはなく話しかけられることを「いやだな」と感じてしまうようになりました。人と「話す」ということがこんなにも難しいと思ったのは初めてでした。

元々人と接するのは苦手なうえ、「職場」というだけでとても重苦しい気分になっていたのですから、うまく話せるわけがありません。そんな僕の緊張や重苦しい気分が周囲の人たちに伝わってしまったのか、初日は会話の途中から沈黙が続いてしまい、いつのまにか自分の笑顔がひきつっていたのに気づきました。その夜は反省し、「明日はどんな話をしようか、どう話をつなげようか」ということを考え、必死に本や新聞を読みました。

すると次の日は心の準備ができていたせいか、だいぶ緊張もほぐれました。仕事も一日目よりは覚えることができ、よりスムーズに行動することができました。お客さんと話していても、一つ一つの話がとてもおもしろく感じ、僕の顔も自然と笑顔になっていました。

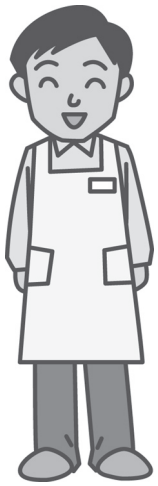
話の中には、小学校内にゼロ戦があったことや、初めてカラーテレビを見たときの話など、自分の持っている教科書を読んだときよりはっきりとそのときの様子が伝わってきました。お客さんは学生時代が戦中・戦後の人ばかりなので話を聞いていてとても新鮮でした。まだ二日目なのに自分でもこんなに話すことができたことに驚きました。僕はその日職業体験のあと部活動の練習があったのですが、ふだんより快い気持ちで臨むことができました。

次の日から僕にはデイケアでの「お得意さん」というものができました。同じ職場で体験している友達とも「あの人と話していると楽しい」など教え合って協力していました。僕は少し「お得意さん」に依存してしまうときがあり、そのお客さんがリハビリに行ってしまうとつまらない気持ちになりました。そこで、よりたくさんの人と仲良くなろうと次々と声をかけていきました。すると腕の動かない人や話すことができない人、耳の遠い人などがいて、会話を続けることにとても苦労していました。そこへ僕の「お得意さん」の方が戻ってきて、耳元で通訳してくれたり、手話で伝えたりしてくれて、とても温かい気持ちになりました。その日の体験も終わり、お別れのときに力いっぱい手を振ってくれたのがとてもうれしかったです。僕はその人の車いすが見えなくなるまで手を振り続けました。

翌日からどんどんお得意さんが増え、職業体験中の一日一日がとても楽しくなりました。お客さんの楽しそうに話す顔を見て自分までうれしくなり、思わず夢中になって話し込んでしまうことも少なくありませんでした。この職場に慣れてからは時間が過ぎるのがとても早く感じました。最終日には

少し名残惜しく、「まだ続けたいのに」という気持ちがありました。思い返すとこの五日間で体験したことが走馬灯のように蘇ってくるようでした。職場の方にも「できるものならもう一週間やりたい。働きたい。」と言いました。少し冗談めかして言ったのですが、これが職場でもらした僕の唯一の本音でした。自分でもいつのまにかこの「山王リハビリクリニック通所リハビリテーションデイケア」が、もう一つの家のようになっていることに驚きました。

僕はこの職場体験で人と話すことが苦手ではなくなりました。それは職場のスタッフの方々の助けがあり、お客さんの笑顔に支えられたからです。自分の身のまわりの人々に感謝すること、人と「話す」ことは楽しく、どんなに珍しい宝石より美しくまぶしい「笑顔」を見ることができること・・・。学んだことはたくさんあります。いろいろな意味で進路の視野が広がり、とても良い経験になりました。これからはこの経験を活かし、少しでも多くの笑顔を作ることができる「一人」になれるよう、がんばりたいです。



ものづくりと人、そして、未来へ

北区立十条富士見中学校　二年
鈴木紫央里

一年生の時、私は技術の授業でマガジンラックを作りました。作るものは指定されている四種類の作品の中から自分が作りたい作品を選び、最初の木を切るところから最後の仕上げのワックスぬりまでの作業を、全て自分でやるというものでした。私が四種類ある中からマガジンラックを選んだのは、家でとっている新聞は読み終わるとすぐに紙袋に入れるので三、四日前の新聞を探すのにもチラシを出しながらで大変だったので、探しやすくて取り出しやすいマガジンラックがほしいと思ったからです。つまり、その時はマガジンラックに「新聞」を入れることが目的でした。

しかし、木の部品を組み立てているうちに新聞よりも小さなサイズの本なども入れられるようにしたいと思うようになりました。そこで新聞の面と接する二つの正面につける横長の木材の位置を、正面によって変えることにしたのです。マガジンラックは真ん中に立てた木材によって、新聞などを入れるところが二つに分けられていたので、正面は二つになり、正面によって木材をつける高さを変えることで片方には新聞が、もう片方には新聞より小さなサイズの本が入るようになったのです。この後、やすりがけをして角をとり、肌ざわりを良くしてからワックスをかけてつやを出しました。

やっとのことで作品が完成した時、私の心の中はうれしい気持ちでいっぱいでした。それは一つ一つの作業に気持ちを込めて、頭の中では次にやる作業や完成した作品を思い浮かべて一生懸命に取り組んだからだと思います。そして、私はこの過程の中でわかったことがあります。

それは、作っている人の心が作品にそのまま表れるということです。このことはものづくりに限らず、楽器を演奏したり、字を書いたりするなどの事柄にも言えます。ただし、ものづくりが他のことと違うのは、例えば製作者が怒っていてつい余計な部分まで削ってしまったとします。もしこれが木ならどうでしょう。多少は誤魔化すことができたとしても元には戻りません。つまり、集中していたならしなかったミスを心の乱れから起こしてしまい、作品にはその証として傷が残ってしまうのです。もちろん、作る人が穏やかな気持ちで集中していれば、その時はきっとその人らしい作品が出来上がるはずです。そして、その作品を見た人も心に何かを感じるはずです。

さて、今までのは一般人にいえることですが、職人ならどうでしょう。私は職人がつくったものにはその職人の「魂」が入っていると思います。「大げさだ」と思う人もいるかもしれませんが、職人はその「もの」をつくることに何十年と携わり、そのことに関しては知識も体験も豊富な、いわば「専門家」なのです。ですから、自分のきげんで作るものの扱いを乱雑にしたりはしないと思います。そして、作るものにはきっと強い想いを持って取り組むはずです。と言っても、想いだけなら先程書いた一般人と同じでしょう。ですが、職人はそれまでに身をもって体験した、たくさんのことをものづくりに生かしています。それは、今までおくってきた人生の一部をその「もの」に込めることと同じだと私は思っています。

また、一年生の国語の教科書に載っている〈さんちき〉という話には車大工の親方の言葉として「車大工は木を削りながら自分の命を削ってるんや。」というのが載っています。私はこれこそものづくりに対する職人の、職人にしか出てこない魂の言葉だと思いました。この言葉は、職人でも何でもない私の心にでさえ何かすごいものを感じさせました。それだけ私にとって心に響く言葉でした。

私はまだそんなに生きていないので何かに人生や命を懸けて取り組んだことはありません。でも、私はマガジンラックを作ったことで一生懸命にやることで得られる喜びを知ることができました。そのことは、きっと他のことにも共通しているはずです。将来、私が人生を懸けてやりたいと思える仕事を見つけたときは今回学んだ強い想いを持って取り組めると思います。

これからの私達にとって大切なことは、私達のような若い人達にものづくりのすばらしい技術である職人技を伝えていきそれを受け継ぐことだと思っています。私のつくったマガジンラックはいつまでも大切にして、自分の子供ができたらそれを見せてあげたいと思います。

ミニベンチを製作して

北区立十条富士見中学校　三年
石曽根斐子

将来建築関係の仕事に就くために、二年生になったら選択技術を取ることに決めていました。

私がまだ、中学校に入学する前に、自分の家を建て直すことになりました。その時にとても優しく親切に、いろんな事を教えてくれた人がいました。その人はインテリアコーディネーターの人でした。その人の仕事を見ていたら、自分も将来この人のような仕事をしたいと思うようになりました。

また、私の父と叔父も建築関係の仕事をしていて、大変楽しそうに仕事をしているのを見て、選択技術を選んだことも、もう一つの理由でした。

選択技術では、課題が木材加工で「ミニベンチ」の製作でした。最初の授業では、男子十二名で、女子は私一人でした。ちょっと「エー」と思いましたが、私はどうしても技術の授業を受けたかったので、私は女子一人で我慢して、やることにしました。

「ミニベンチ」といっても、複雑に板材と角材の組み合わせではなく、長さ1800㎜、40㎜の高さで、幅が90㎜の角材二本にけがきをし、それぞれの寸法で切断することでした。一年生の時に板材の切断をしていましたが、今回二年生でのこの作業は大変むずかしく、うまく切断できず、途中で割れてしまったこともありました。でも何とか上手に切断することができました。時々、家具店に置かれている家具を見ると、とてもすてきなものばかりで、私が製作しているイスなどは比べものになりませんでした。しかし、このミニベンチは世界に一つしかない私の作ったものなので、今一度気を入れなおして、製作することにしました。

部品一本一本ていねいに、紙やすりをかけた木にはぬくもりがあり、ついほほずりしてみたくなりました。つるつるしてとても気持ちがよかったです。

次に組み立てに入ることになりました。しかし、仮組み立てをした時に、自分では寸法通りと思っていたが、合わない部分が出てきてしまいました。部品の修正をして、やっとの思いで部品を完成することができました。仮組み立てという作業の大切さを身をもって知りました。

いよいよ組み立てです。長さが約6㎝の木ねじを電動ドライバーでとりつけ、接合していきました。私は力が弱いので先生に少し手伝ってもらいねじどめをしました。途中までは、先生に板材をおさえてもらい組み立てをしましたが、そのあとは全て自分で行うことができました。

一つ一つの部品が徐々に組み立てられていくのを見て、胸がドキドキし、楽しくなってきました。やっと形は完成したのでちょっと座ってみたくなりました。なかなかいい気分でした。

次に、ガスバーナーで焼くことになりました。着火した時に大きな音が出て、騒ぐことが多くありました。同じ箇所にうっかり固定してしまうとこげてしまい、失敗することが多

くありましたが、何とか終了することができました。しかし、終わったと思っていたら、裏側の方が全くできていませんでした。あわてて、そちらの方も焼くことにしました。見えない部分にも同じように、焼くことは、大切だと思いました。

そして透明な水性ニスで塗装をすることになりました。一度塗るだけで良いと思っていたが、塗ってもあまり輝きがありませんでした。私は光り輝くようにていねいに塗装をしました。これは、やればやるほど楽しくなり、他の人に負けないくらいつやを出すことができました。

毎時間少しずつ作業をして大変でしたが、世界に一つだけ私のミニベンチが生まれました。物づくりは、私にとって、楽しくかつ夢を与えてくれました。

現在、父や叔父が建築関係の仕事をしているのですが、私が「ミニベンチ」を作る以上にもっと責任など大変なことが多くあると思いますが、できた時の喜びは、すべての苦労を洗い流してくれると思います。

私の作品は、北区中学校連合展に出品され、さらに東京都中学校美術展覧会にも出品させていただきました。賞をいただきましたが、これも担当の先生をはじめ、木を育ててくれた人や製材をしてくれた人、運搬してくれた人達の多くの手間がかかって、私の所に来たと思っています。すべての人が働いているお陰だと思っています。これから将来の希望の職業に向かって、一生懸命に努力していきたいと思っています。

中学校の部・優秀賞の皆さん

中学校の部　佳作

将来の夢

愛国中学校三年
中野志保

私には、将来の夢があります。それは、『ダンサー』になることです。私がダンスを始めたきっかけは、中学の部活に入ったことでした。それまで一度もダンスなど経験したことが無かったが、先輩たちが楽しそうに踊っている姿を見たことと、自分自身を今一度、見つめなおしたいと思ったからです。何か新しいことに挑戦することで、『自分を変えることが出来るのではないか。』『変えたい』と考えていた時期でもあったのです。

私は、小学生の頃、一年生から五年生まで乗馬を習っていました。そこでは月曜日から金曜日までの放課後、土曜・日曜日の午前・午後と、毎日練習がありました。私が練習に行かなくなってしまったのは、小学四年生頃でした。一度、友達と遊んだことがきっかけで、それ以降、徐々に練習を休んで友達と遊ぶことが増えていきました。練習をせず遊んでいた私とは反対に、毎日練習をする友達は、段々と上達して行きました。それを知った私は、練習に行きづらくなり、ますます練習を休む回数が増えていきました。そして、ついには乗馬を辞めてしまいました。

私には中途半端で辞めてしまった事がもう一つあります。それは、小学校四年生から六年生までやっていた、『吹奏楽』です。六年生も終わりに差し掛かり、中学受験が終わった頃、それまで勉強と練習だけを繰り返し行っていたことに嫌気が差し、練習もせず遊んでばかりいました。そして、徐々に周りから後れを取るようになり、逃げるようにして辞めてしまいました。私は、途中で逃げて、辞めてしまった『乗馬』と『吹奏楽』に対し、後悔の念が残りました。それは今でも、そして、今後とも変わらない思いです。自分の弱い心が原因で生じてしまったこの二つの『後悔』が、『自分を変えたい』という気持ちにさせたのです。

友達に誘われて入部したダンス部は、私が思っていた以上に先輩方が優しく、とても良い雰囲気の部でした。やるときはやる、休むときは休む。と、とても折り目正しい練習をしていて、私は、「これが部活動なんだ」と感動したことを覚えています。ダンスを始めて間もない頃は、人前で踊ることを恥ずかしいと感じていましたが、段々と上達し、慣れて行く内に、人前で踊る事を恥ずかしいと感じるのではなく、むしろ、楽しいと思うようになりました。学校の行事や、外でのコンクールなど、舞台に立って踊る度、少しずつ自信を持つことが出来るようになり、毎日の生活が充実していきました。「ダンスが好き」「ダンスが楽しい！」そういう気持ちが増すにつれ友達から「輝いている」と言われ、本当に嬉しく感じました。練習にも熱が入り、上手くなりたいという向上心や、勇気が湧いてきて、より一層頑張ることが出来ました。ですが、何かを始め、上達して行くのが目に見えるのは最初の方だけだという事はわかっているつもりでした。そして、

そこで諦めず練習をすることでより上達することが出来るという事も分かっていたつもりでした。それでも、周りと自分を比べ、一人落ち込んで、また、「逃げたい。」という気持ちが込み上げてきました。だが、ここで休んでしまえばまた、ずるずると休み続け、結局は辞めてしまうという、そういう事態が嫌で、そういう自分を許せなかったので、絶対に休むことだけはしませんでした。しかし、その頃の私は部活を休みこそしなかったものの、真剣に取り組んでいたとは言い難い態度だったと思います。練習をしていても、身が入らず、もうダメかと諦めかけていました。そんな時私は母に誘われディズニーランドに行きました。そこでは、自分がダンスを始めるまでは全く興味の無かったパレードで、足を止め、とても感動している自分がいました。ただ、ダンスが上手いだけでなく、これだけ素晴らしいダンスが踊れるようになるまでどれだけ練習したのだろうかとか、どれだけ自分の上達に悩んだのだろうかとか、様々な思いが込み上げてきました。そして、これだけ沢山の人を『ダンス』という表現方法で感動させ、夢を与えることが出来る『ダンサー』という職業に、とても強い憧れを持ちました。それからは、何かが吹っ切れたかのように、うじうじと悩んでいたことに対し踏ん切りがつき、ただ、ダンスを純粋に愛し、「楽しもう」と再び思うことが出来るようになりました。

私は、自分を変えるきっかけをくれた『ダンス』に、とても感謝をしています。今まで私は、自分自身から逃げていたのかもしれません。辛いこと、苦しい事があるたび理屈を付け逃げていた自分を今、恥ずかしいと思っています。逃げることで終わらせるのではなく、苦しい中で耐えることにこそ、本当に意味があるのだと、改めて認識できた事を、本当に良かったと思っています。今後とも、ダンスを続け、人々を感動させられるような、そんなダンサーになることが私の夢です。

気分的に落ち込んでいた私を、気分転換にとディズニーランドに連れて行ってくれた母。いつも私を見守り、応援してくれます。だから、母の喜ぶ姿を思い浮かべながらこれからも、挑戦していきます。

ものを生かす

港区立高松中学校　三年
小谷拳乙

「お前がこいつに魂を吹き込んだんだな。壊れていたものを直して生かし続ける。これって最高にカッコイイ」

ある日、父に言われたこの言葉を僕は忘れることができません。父が灯してくれた夢に向かって、今、僕は歩みだそうとしています。

僕は、ものを作るのが大好きです。技術の作品、美術の作品、時には家庭科の裁縫も、僕は楽しくて仕方がないのです。

また、プラモデルもよく作ります。定期テストの二週間前に買いに行って、後は、テストが終わるまでずっとしまっておきます。そして、テストの最終日の夜にプラモデルの箱を

開けます。その時、僕の胸は躍ります。今はバラバラのパーツが最後には一つになるんだと思うとたまらなくワクワクとしてくるのです。その後、毎日丁寧に少しずつ組み立て、徐々に完成に近づいていく僕の分身のようなプラモデルにどんどん愛着が沸いていきます。最後に色を塗って完成になりますがその時には、世界で一つだけの、そして他の誰が作ったものにも代え難い、自分の宝物になっています。そして、作り終えた時の達成感、一から自分で作ったんだという誇りは何回味わっても飽きることはありません。

僕の父は、楽しそうにプラモデルを作っている僕を見て、いつもニヤッと笑ってどこかに行ってしまいます。

先日、田舎に帰省した時に大掃除をしました。廊下を雑巾掛けしていた僕にふいに近づいてきた父が

「お前に仕事をやる。ここに壊れたちゃぶ台がある。外のガレージから適当に道具を探して、こいつを直せ。」

と言いました。しかし、そこには、壊れたちゃぶ台というよりは、バラバラの木片が置いてありました。

「こいつ、元どおりになるのか。」

と思いながらも、僕は、プラモデルを組み立てていくかのように一つ一つを丁寧に合わせていきました。しだいに、僕の頭の中には、立派に生き返った姿が浮かんできていました。そして、ついになんとかちゃぶ台の形にすることができたのです。

父に報告しに行くと、喜びながら僕のことを褒めてくれました。そして、

「このちゃぶ台はお前のお陰で、命を長らえたわけだ。あのままだとゴミになっていたかもしれない。いわばお前がこいつに魂を吹き込んだんだな。壊れたものでも直せば使えるんだ。壊れたものを直して生かし続ける、これって最高にカッコイイと思わないか。そして、ものを生かす技術を持ってるってことは、人に誇れるすばらしいことなんじゃないか。」

と、僕の直したちゃぶ台を見つめながら言いました。僕も命を吹き返したちゃぶ台を見つめながらじっと聞いていました。

なんだか心にじんわりと入ってくる言葉で、僕の前に、「ものを生かす」そして、そのことによって「自分を生かす」道がはるかかなたにではありますが、ゆっくりと開けてきたように感じました。一人、そんな思いに浸り、気づいたら父は、またどこかへ行ってしまっていました。

僕は、今日も「ものたち」と楽しく対話をしながら何かをつくっています。

学習した過去と未来への展望

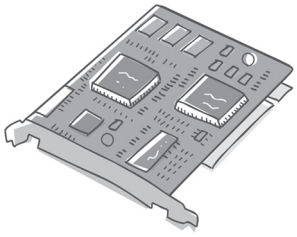
新宿区立西戸山中学校　三年
西　忍

「高校でも好きな技術を学び、自分自身を高めていきたい。」
これが、今自分が強く感じていることです。そんな僕が、工業系の学校に進みたいと望むようになったのは、ごく自然なことのように思えますが、これまでの三年間の技術の授業がなければ、そう感じることもなく、まして世の中の技術に興味を持つことさえもなかったと思います。
技術の授業は、中学校一年生の僕にとっては、未知の世界でした。しかし、「ものづくり」がもともと好きな僕にとって、不安よりも楽しみだという気持ちが、とても大きかったです。さらに、その興味・関心は、授業を重ねるごとに、「技術が好き」という気持ちに変わっていきました。そして、今では技術の授業が一番好きな授業になりました。それは、先生の教え方や授業内容がとても充実していたからだと思います。
技術の授業内容は、即生活に生かせるものや役に立つものが多いです。製品によって木の木目の扱い方に違いが出たり、たこ足配線の危険を回避したり、普段の生活でよく目にすることについて学べると、とても得をしたように感じます。実は、我が家でたこ足配線は当たり前のように使われていました。
「店で売っているものなのだから、フルで使っても問題はないだろう。」
と、安心していました。しかし、定格値を超えてしまうと、火災の原因になってしまうということを学習し、使用方法を改めることができました。
この三年間の授業で一番印象的だったのは、二年生のときのラジオ製作です。部品のはんだづけ、パソコンでのプログラムの挿入など、新しいことを学び、完成が近づくほどに達成感が沸いてきました。
「この機械は完成すると、ラジオ放送を受信するだけでなく、液晶画面に時刻が表示されたり、自分が作ったプログラムによって、絵や文字、音楽を流すことができるんだ。」
そう思うと、優越感なども芽生え、作業がより楽しいものになっていくのです。その反面、丁寧に作業しないと、今までの努力は水の泡。部品のはんだづけができなければ、プログラムの挿入さえもできなくなります。
「もし失敗して、機械としての役割を果たせなくとも、修理に出せば完成した状態で戻ってくる。」
しかし、それだけは僕は避けたかったのです。だからこそ、一つひとつの作業を丁寧に行いました。その理由は、自分の作品として愛着が沸き始めている作品に、さらに愛情を込め、頑張っているにも関わらず、ちょっと壊れたからと言って、他人の手を借りて完成させることで、なんだか自分の作品ではないように思えるからです。箱を作り、部品の回路をつなげようと努力してきたのだから、結果がただの箱になってしまっても、それは努力の結晶に違いありません。他人からす

れば、ただの箱になってしまっても、それは世界でたった一つの箱に違いなく、僕にとってはとくべつなものなのです。そのような理由から、僕は失敗した作品でも、堂々と机の上に飾っておきたいと思います。

「ものづくり」を通して、作ると言う行為が好きになり、またどのようなものでも愛着を持てる僕は、工業系の高校に入ろうと考えるようになりました。さらに、中学校に出前授業として工業系の学校の先生が来てくれたことを通して、一つの高校に興味を持つようになりました。その後、学校見学等に何度も訪問し、その学校について知れば知るほど、入学したいという気持ちが高まりました。入学できたら、もっとたくさんの世の中の技術について学び、さらに技能力を高めて行くことができると思います。そうなれば、これまでの三年間の授業で学んだことを生かすことができるはずです。

今の僕が身につけている「技術」は、未熟でとても小さいものです。残された中学校生活、まだ体験したことのない高校生活を通して、その「技術」をもっと濃厚で、意味のあるものへと変え、さらに身についたことをフル活用し、これからの生活をより豊かなものにしていきたいと思います。



身の回りの技術と将来

新宿区立西戸山中学校　三年
明石和謙

中学校の授業で、小学校の授業と一番違うと感じることは、技術の授業があることです。しかし、入学したばかりの頃の授業は、素材の性質についての授業ばかりで、正直おもしろくありませんでした。さらに、自分にとってあまり必要がない授業だなと思っていました。しかし、材料の性質を生かしたものづくりの授業が始まると考え方は変わりました。材料の性質を生かしたものづくりは、とても時間がかかるのです。この授業を通して、ものづくりの難しさを感じるようになりました。

僕の身の回りには、たくさんの「もの」があります。同じ「もの」でも、自然界に存在する木材、人工的に作り出したプラスチックや金属など、あらゆる材料があり、それの性質を理解して、生活に役立つ「もの」にしてしまうのは、すごいと思いました。この授業で僕が作った「もの」は、材料の性質を生かし切れず、優れた製品と呼ぶのにはふさわしくありませんでした。正直なところ、工作には自信があったので、ものすごくショックを受けてしまいました。しかし、将来の夢がエンジニアである僕は、ここであきらめるわけにはいきませんでした。その後も一生懸命作業を行い、「このぐらいできなくてどうする。」という強い気持ちを持って取り組むこ

とができました。そのおかげで、僕の技能力は少しずつ高まっていきました。その結果、中学校に入学してから二つ目に作った製品は、前回の作品に比べ、材料の性質を生かした製品となりました。しかし、使いやすさを考えると、まだまだ改善点はあります。

この経験から、僕が学んだことは、材料の性質や加工方法も大切ですが、それよりも大切なことは、使う人の気持ちを考えるということです。今の僕は、使う人のことを考えたものづくりをしていこうという気持ちでいっぱいです。

「ものづくり」は、材料加工だけではありません。コンピュータによる実習もあります。二年生の実習では、広告を制作するということがありました。このときは、文書処理ソフトウェアを使いました。僕はパソコン部に所属しているので、普段からコンピュータを使う機会がたくさんありました。それでも、使えば使うほどに、次から次へとわからないことが出てきます。だからこそ、コンピュータについて学習しようという気持ちが生まれるのだと思います。もし、ちょっと勉強しただけで、完璧に使うことができれば、向上心が生まれることもなく、すぐにあきてしまうと思います。

パソコン部での活動では、名刺やポスター、ホームページの作成、３Ｄ画像の作成、パソコン検定受験というものがあります。先日受験したパソコン検定では、残念ながら準二級に合格することはできませんでした。でも、もっともっと勉強して、中学校生活で合格したいと思っています。

コンピュータを初めて使ったのは、小学校のときでした。今思えば、小学生だった僕にコンピュータを自由に使わせてくれた母に感謝することができます。そんな母の存在があったからこそ、「ものづくり」への興味も高まったのだと思います。

卒業を目前に控えた今、技術の授業では、環境に配慮した「ものづくり」の一つとして、「鋳造」について学んでいます。この授業を受けるまでは、なじみのない「技術」でした。一度石膏で型どりすれば、うまく金属が流れなくてもやり直しがきくし、研磨作業の中で削り過ぎるという失敗をしても、何度でもやり直すことができます。そんな「鋳造」に驚きつつも、実は中学校に入学したばかりのときに学習した「材料の性質」がここでも生かされていることに気づきました。そこで初めて、三年間の学習の継続性に気づくことができました。

「技術」の授業が僕に教えてくれたこと。材料の性質を生かしたものづくり、使い手の気持ちを考えたものづくり、作り手の思いを表現することの難しさ、授業で学習したことが社会や地球と深く結びついていること。ここで学習したことは、目の前に広がる将来の生活へと生かされて行くと、僕は感じています。

仕事への価値観

新宿区立西戸山中学校　二年
蒔田博文

今はまだ学生の私たち。しかし、あと数年もすれば社会に出て働くことになります。実際に働いたことなどない自分たちにとって、先日行われた職場体験は、これから就職について考えていく上でとても役に立つものとなりました。

私は子供と遊んだり話したりするのが好きなので、児童館で三日間、仕事をさせて頂きました。少人数の子供とは、何度も関わったことがあるのですが、多人数で遊んでいる子供たちには、なかなか声をかけることができず、初めのころは、残り少ない時間で、一緒に遊んだりできるかとても心配でした。そんな私に声をかけてくれたのは、児童館の館長でした。今は先生方とも子供とも、とても上手く接している館長ですが、この児童館で初めて働いた時は、自分から子供たちと接するのにとても苦労されたそうです。他の先生方も、少なからず同じ経験をされたと言われ、とても気が楽になりました。また、子供と接する以外にも、様々な仕事を体験させて頂きました。その中でも、一番印象に残ったことは、行事やイベントの準備や実験です。児童館には小学生から乳幼児までと、いろいろな年代に合うイベントが、毎日のように催されています。それだけに、その準備はとても手間がかかるものでした。場合によっては安全性を確かめるために、イベントにかかる時間以上に、準備に時間がかかるそうです。実際に体験しないと、こんなに準備に時間がかかる事とは、なかなか分かりません。私たちが想像している「仕事」と実際の「仕事」は全然違うのだなと思いました。だからこそ、働くことにはやりがいがあるのではないかなと考えました。

話は変わりますが、皆さんはなぜ仕事をしなければならないのか考えたことはありますか。私は小学生の時に、「仕事自体が存在しなかったら」と一度考えたことがあります。それでは、もし仕事を人間が全くしなくても良い世界になってしまったらどうなるのでしょうか。

仕事は収入を得るためにもしているのですから、仕事をしなくても良いということは、何もしなくても、お金を得ることができる、ということになります。お金があれば買い物ができますが、その商品を作る人がいないので、買い物すらできなくなってしまいます。要するに仕事をすることは、売買などの社会の輪をつなぐ存在、と言えるのではないでしょうか。最近は農業、漁業などの職に就く人が減っていると聞きますが、そのせいでバランスが崩れ、他の職にまで悪影響が及んでいるのかもしれません。また、工場や輸送、調理関係の仕事では、作業が機械化し、またこの不況も手伝って、昔と比べると同じ職でも、大分、必要な人間の数が、減っているそうです。昨年、働く意欲があるのにも関わらず、働くことのできない人の完全失業率が5％を超えたそうです。働く意欲のない人はともかく、必死に職に就こうとしても、仕事を得ることのできない人がこんなにも増えているのは、大変遺憾です。このご時世だからこそ、私たちは、人一倍、職に

向き合う必要があるのではないのかなと考えました。仕事をいややややっていたら、本来の仕事のありがたみが分からなくなってしまいそうだからです。今回の体験でも、最初の日は想像以上の大変さに、その大変さばかり感じていました。でも、二日目、三日目になっていくにつれて、それ以外の良い面もたくさん見つけることができました。

仕事自体を楽にすることは、ほぼ、不可能ですが、その仕事に自分から上手くつき合っていこうとすれば、きっと働くことを楽しむことができるはずです。それと、自分が得意な職業に就くことが何よりも楽しく、働くために重要なことなのだと、私は今回の体験を通して分かりました。仕事を少しでも「楽しい！」と感じることができるように、自分の得意なことや、そのような職業について知っていきたいと思いました。

三年生になると、家庭科の保育実習で子供と接する機会があります。職場体験を生かし、さらに幼児との関わりについて、学びたいと思います。新たな発見が、保育士や児童厚生員といった職業について、より深く考えるきっかけになるといいなと考えています。

家事

文京区立第六中学校　三年
水野峻介

私が中学校二年生の時、親が離婚した。それまで家事はいつも母がしていた。料理作りを始め、食器洗いや洗濯、すべてやってもらっていた。母を手伝うのは学校の宿題で「親の手伝い」が出たときくらいだった。

私は幼稚園生くらいから水泳を習い始めた。選手クラスに上がってからは、朝練もあり、大会にも出たりしたが、その時々の朝ご飯やお弁当を母は朝早くから起きて作ってくれていた。早い時は夜中の三時から作ってくれていたようだ。そんな母に私は「ありがとう」という言葉をあまり言ったことはなかった。母親なんだからそれくらい当然だろうと思っていたのだ。母のお弁当はチームの中でも好評で、とてもおいしかった。母は料理のタレを作るのがうまく、タレ作りの天才だと思ったくらいだった。

母は裁縫もうまかった。作れない物はなんにもないと思えるくらい手先が器用だった。しかし、残念なことに私は不器用だ。そこは受け継がれなかったようだ。だから学校でエプロン作りをしたときの出来は悪かった。友達とおしゃべりをしていたわけでもなく、自分なりに一生懸命やったのだが、仕上がった作品はとても汚かった。

家庭科の授業で調理実習があったが、すべて女子にやって

もらっていた。今考えるととても恥ずかしいことだった。そんな状態だったから、今のままいくと私は料理ができない大人になるのではないかと不安になる。私より年下の小学校の低学年の子がケーキを作っているところなどをテレビで見たりすると、何もできない自分と比べ恥ずかしくてたまらなくなる。しかし、だからといって何か努力しているわけではない。恥ずかしいと思うなら普通は料理本を買ったり親から教わったりするのだろうが、何の努力もしていない。なぜなら面倒くさいからだ。むしろもっと楽に料理ができないかなどと考えたりしている。それでも最近やっとできるようになったものもある。それはご飯を炊くことだ。炊くと言っても炊飯器でやるだけだが、私にとってはたいへんな進歩なのだ。これを完ぺきにマスターしたら、次はにんじんを切ることに挑戦したいと思っている。

　このように私は料理ができないので家では洗濯をすることが役目として与えられている。洗濯は料理に比べれば簡単だ。洗って、干して、乾いたら取り込むだけなのだから。そう思っていたら、先日テレビで洗濯物の正しい干し方を放送していた。タオルがフカフカになる干し方もあった。それを実際にやってみた。その結果、ちょっと干し方を変えるだけで仕上がりが変わることを学んだ。学校の授業では教えてくれないことをテレビで教わり、科学の進歩であるテレビがあって良かったと思う。

　母のいない今、母の一日がすごくたいへんであったことがよく分かった。掃除、洗濯、料理等々、やりたいやりたくないにかかわらず家族のためにやってくれていたことに感謝している。本当にたいへんだったと思う。

　これからは自分自身を少しずつ鍛えて、将来はパティシエになれるくらいにしていきたいと思う。そのためには、学校の技術・家庭科を大事にしなくてはと思う。

私の目標

墨田区立両国中学校　三年
阿部桃子

　小さい時の夢はなんですか？ケーキ屋さんにお花屋さん。水族館の飼育員さんになりたいと思っていたこともありました。今中学三年生の私は進路について考える時、将来の仕事について想像してみる機会も増えました。夢が現実に近づいてくる時期です。でも、世の中は就職難です。有名な大学を出ても、資格を取っても希望の仕事に就けない人がたくさんいるそうです。夢が夢で終わってしまうのでしょうか。

　私は同じ中学校の友人と二人で幼稚園に職場体験に行きました。そこは私と兄が卒園した思い出深い場所です。遊具や机・椅子が小さく感じられました。あれからもう十年が経っています。それでも園長先生やお世話になった先生方は変わらずに優しく迎えてくれました。この幼稚園の素晴らしいところは、先生方は園児の名前と家族全員の顔を覚えているところです。卒園してからもバスの運転手さんは姿を見つけると手を振ってくれます。父や母が一人で歩いている時でも手

を振ってくれるそうです。ちょっと恥ずかしいけれどこちらも元気に振りかえします。何だか嬉しくて暖かな気持ちになります。小さい時にたくさん愛情を注いでもらって、今も見守られているという幸せな思いを私は伝えたいと考えてこの幼稚園で職場体験を希望しました。

先生方は計画や予定を立てて、準備を十分にして一日をスタートさせます。それでも相手は活のよい生物ですから、予測不可能な行動を次々に起こします。みんな元気な力をどう表現してよいのかわからないようです。おとなしい子に泣き虫さん。恥ずかしがりやに意地悪っ子。大きな声に力持ちの子もいれば、まだ赤ちゃんのような甘えっ子もいます。先生方はどの子もみんな同じように、いつでもどんな時にでも見ています。一人一人を観察しながら安全で楽しく過ごしているか見ています。本当にビックリ、感心というか感動です。便利で性能のよい機械でもこればかりは人の力には敵わないと思いました。こういうことは努力や訓練で身につくことなのでしょうか？私は園児達と一緒にプールに入ったり、歌をうたったり、遊んでいるうちに皆と打ち解けて気持ちが通じるようになりました。小さい子供達の眼が、私たちを見る眼差しが少しだけ変わったような気がしました。始めは少し距離を感じましたが、だんだん信頼してもらっている実感が持てました。十年前、大好きな先生と遊ぶのが嬉しかったし、幼稚園に通うのが本当に楽しかったことを思い出しました。先生に褒めて欲しかったし、見ていて欲しかった。そんな気持ちがよみがえりました。そして先生はそれに応えてくれたからこそ安心できたし、楽しかったのだと確信できました。

どんなに近代的でハイテクな世の中になっても、人間に勝るものはないのだと思います。家族から離れて小さな社会に出たときにも見守ってくれる人がいるという安心感が必要なのだと改めて思いました。今の暮らしの中で頼りになるものは一杯あるし、助けてくれる物もたくさんあります。でも人のぬくもりや心のつながりは、幼稚園に通う小さい時から育まれていくものなのだと思います。今日まで育ててくれた両親や、いつも見守ってくれた人達に感謝しながら、今度は私が近所の子供達や後輩に優しく接することが出来たらと考えました。純粋な心と全身で表現するエネルギーを受け止められる大人になりたいと思います。職場体験の時に、先生方は後ろにも眼が付いていると思えるほどのプロ意識を見せてくれました。今はただただうらやましく思うばかりですが、いつか必ず追いつけ追い越せ！目標がみつかりました。

体験で見つけたこと

品川区立小中一貫校日野学園　二年

廣井花歌

校内行事で職場体験があった。私はファミリーレストランで二日間接客の仕事を体験させてもらった。この職種を選んだのは、生活の中で身近にあり、よくお世話になる場所で気になったからだ。

体験初日。どのような仕事をするのかと、とてもワクワク

していた。また、制服を着ることで、従業員として仕事をするんだ、と責任を感じた。まず、「お客様はもちろん、従業員とも絶対にぶつからないようにする」などといった注意点についての説明を受けた。それから、お皿の片付け方を学び、実践した。いつもは客の目線だったので、仕事は簡単そうに見えていた。しかし、実際にやってみると、常に周囲に気を配りながら接客しなければならないということが、とても難しく感じた。

二日目、お皿の片付けの他に、水やコーヒーなどの飲み物の注ぎに行ったり、運搬をする業務が加わった。どの飲食店でも行っているごく当たり前の作業だ。でも、一つすることが多くなっただけで注意を払う点が増え、たちまち忙しくなった。最後は特別にパフェを作らせてもらい、おいしくいただいた。頑張った後の自分へのご褒美だと思えて嬉しかった。

こうして、長いようで短かった二日間を終えた。

帰宅し、「仕事は疲れるものだなぁ」「でも楽しかったなぁ」などと二日間を振り返っていたとき、ふと店長さんが言っていたことを思い出した。

「大切なのは、お客様を第一に考え、安全と安心を管理することだ」

私は改めて思った。この二日間、自分に与えられた業務をこなすことだけに必死だったが、果たして店長さんの言葉を意識できていたのだろうか。

安全と安心を管理するとはどういうことだろうか、と疑問に思った。

安全な食材を提供することで安心が得られるのは理解できる。その他に、私は、良い環境が整っていることが大切だと思った。

確かに、仕事の量をこなすことは、利益を得る為には大切なことだ。でも、どの仕事も職場の仲間や客といった相手が関わって成り立つものだ。だから、相手のことを理解すること、相手と向き合いコミュニケーションをとることで良い環境、良い職場が整うのではないだろうか。

コミュニケーションとは、具体的に言えば、「挨拶」である。挨拶から始まると、お互い気持ちよく過ごすことができる。

また、「相手への思いやり」もそうである。思いやることで、つまらないトラブルも避けられ、円満になる。

このようなことをすることで、信頼関係が築かれ、最終的には安全・安心につながるのではないだろうか。

そして、それは職場という限られた場所だけではなく、学校や家庭など、私達の日常生活の中でも必要となっていることではないだろうか。

私は今年、とうとう中二の夏を迎えた。もうそろそろ将来のことについても考えていい頃だと思う。しかし、私はまだ必ず就きたいと思う職業はない。これから、じっくりと考えて、自分にぴったり合う職業を見つけるつもりでいる。しかし、その職業が何であっても、挨拶や、相手を思いやることは続けていきたいと思う。かなり基本的なことではあるが、だからこそ、しっかりと欠かさずに今から日常で始めていきたい。そして、人間性を磨いて、魅力のある社会人になれたらな、と思っている。

今回の職場体験は、これから働く上でも、今生活する上でも大切な、身近なことを教えてくれた、思い出に残る貴重な体験だった。

職場体験を終えて

大田区立大森第一中学校　二年
千枝由美子

私は五日間に二ヶ所の職場を体験しました。

一ヶ所目はスーパーです。スーパーを選んだ理由は二つあります。なぜ絶えず新鮮で旬なものが入ってくるのだろうという疑問が挙げられます。スーパーの仕組みにも興味がありました。

私はまず始めに店内を清掃するという事を任せられました。ただ単にごみを集めて捨てるのではなく、床をはくことはもちろん、棚の品物の整理や並べかえなど店を新しくきれいにすることです。もしも、店内がほこりだらけで品物が散らばっていたら、そんな店のことをお客さんはどう思うのでしょうか。私は店の雰囲気も店に置いてある品物も当然よくは見えないと思います。そう考えると、店内を清潔に保つというのはとても大切な事のように思えました。

次に、開店前の挨拶を行いました。なぜこんな事をするのだろうかと思っていたら、お店の方が「お客様を気持ちよく迎えるためだよ。」と教えてくれました。私はお店をよく見せるというより、お客さんがいかに気持ちよく店を利用できるかということが大切なんだなと思いました。

私の主な活動場所は青果売場でした。そこではやはり、清掃から一日が始まります。

だんだん仕事に慣れてくると先の事を考えるようになりました。例えば、果物を袋につめてラベルをはる仕事を任せられました。その仕事が終わった後に、次はこの果物が入っていた段ボールをつぶそう、と効率よく動けるようになり、お店の役に立っているかと思うと作業のきつさも忘れていました。また、売場の方々の優しさに感動しました。私がどうやって作業していいか困っていた時に、お店の方は笑顔でアドバイスをくれました。それは心強くてなぜだかほっとしました。どんな時も笑顔で接してくれる売場の方々は私の目標の人です。私も人に安心を与えられるようなそんな人になりたいと思いました。

二ヶ所目に私が体験させていただいたのは羽田空港の中にあってとても便利なビジネスホテルです。ホテルの中ではい

つもきれいに清潔に整っていて気持ちよく泊まることができます。なぜそのような空間が保てるのか不思議に思い、ホテルを選びました。

ホテルでの主な仕事は接客でもありますが、見えない所での客室の清掃やベッドメイクがあります。ベッドメイクとはシーツやカバーをつけ直してベッドをつくり直すことです。とても力のいる大変な仕事でたくさん注意を受けました。悔しくて一つ一つを意識してみたら上手になったねと褒められました。すごく嬉しかったです。注意する人もお客さんに利用してもらうことを第一に考えているんだなと思いました。ベッドをきれいにつくり変える人がいるから次に泊まる人も気持ちよく眠れると思います。私はこの事がスポーツ選手に重なってみえました。例えばプロ野球のイチロー選手です。試合ではたくさんホームランを打ってみせたり、飛んできたボールをキャッチしたりとチームに貢献しているけれど、影ではかなりの努力をしているように思います。一日に素振りを何百回、何千回、筋力トレーニングや体力づくりなど大変な苦労をして大きな成果を得ています。このようにベッドを気持ちよく利用できるのは、裏で誰かが大変な苦労をしているからです。また、担当者の方が「世界中の人がホテルマンみたいな人だったらいいなとよく思います。」とおっしゃっていました。はじめはその言葉の意味が全く分からなかったけれど体験を終えた今、分かる気がします。それは自分より他人を大切にするからです。仕事だからあたりまえだと思う人もいるかもしれません。でもこれはとても難しいことだと私は思います。どんな時でも気を配って、臨機応変に対応できることはすごいことです。ぜひ私も見習わせていただきたいと思います。私はこの一週間の職場体験で仕事をする大切さや仕事をしたことで味わえる達成感を見つけることができました。私は毎日、朝早く起きて会社に通う父を見てきました。私が眠っている間に帰って来て、私が起きたらすぐに出かけて大変だなと思っていました。でもそのおかげで毎日三食、食べていられるし、好きなことができるのです。

なんで働くの、と聞いたらきっと、お金を稼ぐため、と言う人が多いと思います。でも中には仕事を生き甲斐としている人がいます。働くことは自分のためでもあり、家族のためでもあり、生きていく上で大切な経験です。自分を見つける旅だと思います。

実際にやらなくてはわからないこと

大田区立大森第一中学校　二年

小林亜美

私は、前半の二日間を書店で、後半の三日間を米菓工場で職場体験をさせてもらった。二事業所とも職種を聞いただけだと、それ程大変そうには思えなく、実際私もそこまで大変だとは思っていなかった。しかし・・・。

一、二日目。書店では、書籍の陳列・販売の体験をした。一番はじめに体験した仕事は、書籍の在庫確認だった。店の裏口に山積みにされたダンボールの中には、たくさんの本と

注文書、領収書などが入っていた。その注文書の納品数と本の冊数を照らし合わせ、注文通り納品されているか確かめる作業で、これはスムーズに終えることができた。次に、店内の配置確認。これは書籍の陳列をスムーズに行うためだけではなく、お客様が探している本をすぐに探しだせることができるので、大事だそうだ。体験先の書店は普段からよく利用している書店だったが、地図やハードカバーの本、専門書など配置場所を全然知らなかった本もあり、少し詳しくなった気がした。このほかにも、コミックの保護カバーをかけたり、雑誌に付録を挟んで輪ゴムで留めたりとたくさんの仕事を体験させてもらった。中でも大変だったのが、直接お客様と向き合って行ったレジ打ちだ。サポートだとはいえ、金額の打ち込みからお釣りとレシートを渡すまでの過程を全てやらせてもらったので、とても難しく大変だった。途中あせってしまってレジを打ち間違えたり、レシートの端が切れてしまったりの失敗もあり、いつも短時間でスムーズに会計を済ませている職場の人の手際の良さを知った。仕事のほかにも、担当者の方に現在の書籍市場のことや、本が出来上がるまでの過程も教えていただいた。担当者の方は、電子書籍の普及で紙の本の売り上げがどんどん落ちているから、書店の経営も大変だ、と言っていた。その話を聞いて私は、電子書籍はかさばらないし気軽に読むことができるから流行しているのかもしれないけれど、本の匂いや電子書籍にはないあたたかさなどを、もっと皆さんに知ってもらいたいな、と思った。

三日目以降の体験先の米菓工場では、米で作る餅菓子の製造や販売の体験をした。こちらは他校の二年生も体験に来ていて、かなりの大人数で作業をした。体験一日目は午前中、おかきにする餅を乾燥させるために屋上で餅を広げる作業をした。ひたすら同じ作業をするのは暑いし大変だったけれど、職場の方が「大丈夫？」「頑張ってね」と声を掛けてくれ、とても励みになった。午後はワラビ餅を作る作業をした。食べる物を作る作業なので、衛生面のために帽子をかぶり髪の毛を一切ださないようにし、手にはビニール手袋をつけて作業した。人の口に入るものを扱うのにはここまでやらないといけないのだな、と改めて知った。この作業はなかなかの重労働で、餅は重いしなかなかうまくできなかったり、蒸したての餅がすごく熱くて持てなかったりと大変なことばかりだった。体験二日目、クリーンルームでの袋詰め作業はすごく難しかった。袋詰めが上手くできなくて悩んでいたら、職場の方や他校の生徒にもコツを教えてもらい、なんとかできるようになった。そんなことがあり、午前中はボロボロだった私だが、午後はそれなりに活躍することができた。大福の製造だ。丸めたあんこを大福の生地でつつんでいき丸く整える作業で、これはなかなか上手くやることができた。職場の方にも「上手いわね！」と褒めていただき、とても嬉しかった。体験の中で一番楽しかった時間だった。

最終日は販売店の方で作業を行った。おかきを詰める袋にシールを貼る作業で、私は何枚か貼る向きを間違えてしまった。そのとき、職場の方が「誰にでも失敗はあるんだから、心配しなくていいよ」と私に声を掛けてくれ、とても安心した。そして、昼休憩。担当者の方が昼食を奢ってくださる、とのことで、近所の焼肉屋へ連れて行ってもらった。そこの

焼肉屋にも職場体験中の他校生がいて、忙しそうに作業をしていた。昼食を食べ終え午後の作業も問題なく終わり、あっという間に体験終了時間。こうして、五日間の職場体験は終わった。

　こうして実際に仕事をしてみて、私は、ただ紙の上で職種をみただけではその仕事が大変かどうかなんてわからないのだと、実際に体験してみて初めて知った。職場体験を通してわかったことは、「学校にいるときのような甘い気持ちではやっていけないこと」「仕事をすることの楽しさ」だった。どちらも見えないところでの重労働が多く、普段あまり運動を進んでやらない私にとってはとても辛い仕事だった。しかし、仕事を終えた時の達成感、充実感は疲れを吹き飛ばしてしまうくらい大きなものだった。私にはまだ、将来就きたい職業というものがない。きっとどの職業に就いても大変なことは変わりないだろうが、職場体験で学んだことを活かし、今後の進路を決めたり、大人になって就いた仕事の中に少しでも楽しみや活力を見出したりできるように努力したい。私は、そう考える。

職業体験を終えて

大田区立馬込中学校　三年
重野　茜

　私は職業体験で「松葉寿司」というお寿司屋さんに行きました。

　職業体験で楽しかったことは「だし巻き卵作り」です。職業体験の初日、少し時間が空いているということで私は実際に「だし巻き卵」を実際に作ってみることになりました。はじめに西澤さん（店長）が作るところを見学します。西澤さんはさらさらと卵をとき、軽々と卵を返していて、私にはなんの苦もなく作っているように見えました。それでなんとなく「自分にも出来そう」と思いました。私は少し戸惑いながらも教えられたとおりなんとか作り上げることができましたが、完成したものをみると形は崩れていて少し焦げたりもしていました。悔しかったのでもう一度やらせてもらいましたがひっくり返すところがどうしても上手くいかず、形が崩れ焦げてしまいます。改めて「プロはすごい」と思いました。

　私はどうしてもきれいに返せるようになりたくて毎日最低でも二回「だし巻き卵作り」をやらせていただきました。うまく返せなかったり、返せても形が崩れてしまったり、時間がかかりすぎて焦げてしまったりと、たくさんの失敗とたくさんの悔しい思いをしましたが、いつしか夢中になってとりくんでいました。練習を始めて四日目、ようやくきちんと返

すことができました。そのときは文字通り飛び上がって喜びました。そして最終日の五日目には焦げ目もなく形をきれいに整えて返すこともできるようになりました。あきらめず何度も練習を積み重ねればいつかは成功するということを強く実感できました。

大変だったことは「魚をさばく」ことでした。切り身ではない一匹まるごとの魚に触れた経験がなかったので、魚の姿が怖くて触れることさえもできませんでした。頭を押さえるときなどはとても緊張しました。勇気を出して思い切ってやってみるとそのうち普通に触れるようになりましたが、「魚は鮮度が命」ということで常に氷水につけてあります。その水がものすごく冷たくて指先の感覚がなくなるほどでした。

また、なにより注意され難しかったのが包丁の持ち方でした。「三枚おろし」をはじめてやってみたとき、私は特に意識することなく普段通りに包丁を使って「三枚おろし」に挑みましたが、骨にたくさんの身がついてしまい、たとえはじめてだとしてもさんざんな出来になってしまいました。そこで西澤さんから丁寧に包丁の持ち方や使い方を教わり、それからやってみると不思議なほどうまく切れるようになり、手伝って頂かなくてもとりあえず一人でできるようになりました。これが二日目の火曜日のことでした。

翌日の水曜日はお店の定休日でしたが、学校で「なめろう丼」をつくることになりました。そこには三十匹ほどの魚が用意されていて、この魚を「すべて一人でさばけ」と言われたときは驚きました。うまくできるかどうか不安でしたが、教えて頂いたことを思い出しながらやってみると案外スムーズにできました。やはり氷水が冷たくて最後の一匹をさばくころには手がかじかんでしまい、さばき終えたときには思うように指先が動かなくなりました。

そして最も印象に残ったのが「築地市場」に行ったことです。その日は朝の四時半に出かけました。二月ですから真っ暗で寒さも厳しく、そしてなにより眠くて想像していた以上につらいことでした。しかし築地につくと見たことのない世界が広がっていて、寒さも眠気もいっぺんに吹き飛びました。そこには今まで見たことのない「本物」がたくさんありました。まだ生きているナマコ、人間が何人も入ってしまうほど大きな水槽で泳いでいるたくさんの魚たち・・・。スーパーのパックという形でしか知らないものたちの、本当の姿がそこにありました。

そしてこんなに朝早くからたくさんの人たちが働いているということにも驚きました。場内は迷路のようで、一人で入ったら抜けられそうもないほど複雑でしたが、どこをみてもたくさんの人がいて、思うように話せないほど活気がありました。その後、場外で朝ご飯を頂きました。特別に変わったものを食べたわけではないけれど、いままで食べたことがないほどおいしく感じられました。

この五日間、日常の生活では決して体験できないようなことを体験することができました。そこから私はたくさん学び、そして考えることができました。つらいこともあったけれど楽しく体験ができたことを、西澤さんをはじめお店の皆様に感謝したいと思います。

職業体験

大田区立馬込中学校　三年
木内龍之介

職業体験に行く前は上手く仕事ができるかどうか不安でした。そのせいか事前の打ち合わせでは緊張してしまい、あいさつも堅苦しくなってしまいました。

けれども職業体験期間中は与えられた仕事を忠実にこなし、そのうえ自分からすすんで仕事を探すことができました。その結果、楽しい職業体験になりました。

その楽しかった職業体験の中には、大変な仕事もたくさんありました。園児たちのお世話をすることが一番大変だと思っていましたが、そうではありませんでした。園児たちが寝ている間に紙や粘土で工作をしたり、絵本の修理をしたり、おもちゃをタオルでふいてきれいにするような仕事、つまり園児たちを直接ではなく、陰で世話をするような仕事が多くあり、そしてこれらの仕事が実際にやってみるととても大変なものでした。このような仕事は簡単にこなせるだろうと自信がありましたが、思っていた以上に細かくて集中力を必要とする仕事だったので、気が遠くなりそうでした。肩と目が疲れましたが、子どもたちを喜ばせるために仕事をしているんだ、という気持ちで取り組みましたので、疲れはするけれども、休みたいという気持ちは一切ありませんでした。だから仕事を最後までていねいにやり通すことができました。そして先生方や園児たちがお礼を言ってくれたので、大変だった仕事にやりがいを感じました。これらの仕事のおかげでものごとに集中して取り組む姿勢が鍛えられたように思います。また感謝の言葉に対して「どういたしまして」と感謝を受けとめる言葉ではなく、「こちらこそありがとうございました」という言葉が素直に出るようになりました。

園児たちが起きている間は、園児たちと園庭や階段で遊んだり、絵本の読み聞かせをしたり、工作を手伝ったりしました。園庭では鬼ごっこや縄跳び、雪合戦などをして遊びました。園児たちは意外に運動神経が発達していて、三才児になるとボールを強く蹴ることができ、四才児は大縄で十回以上も跳ぶことができ、五才児はフラフープが上手にできるようになります。僕はフラフープが苦手で上手くできないので、園児たちが上手にやっているのを見て、器用さに驚きました。

また階段ではマットで滑り台を作って遊びました。とはいっても、僕は階段の上でマットをおさえ、一才児が遊んでいるのを見ていただけです。先生が園児たちに、上までのぼったら僕の手やひざ、名札などにタッチするよう指示すると、子どもたちは滑り台をはうようにのぼって僕にタッチをしてきます。一才児になる頃には簡単な会話もできるようになるので先生の指示も理解できるのでしょう、みんな指示通りに一生懸命にのぼってきます。この遊びは結構きついかなと思いましたが、子どもたちは疲れた表情を見せませんでした。

遊びは園内だけではなく、外に出て散歩することもありました。散歩では0才児と保育園周辺を巡り、メダカや鳥の観察をしました。0才児の子どもは車や犬を見るたびに「ブー

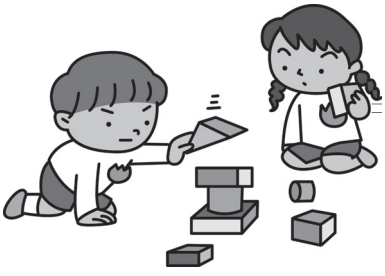
ブー」とか「ワンワン」などの言葉を発します。この時期から言葉や単語を覚え、人の話を理解していることに驚きました。0才児たちと外を散歩していると、園内のがやがやした雰囲気から一転して、ゆったりとした時間が流れているのを感じました。

園児たちはこのようにして体力をつけたり、言葉を覚えたりするのでした。遊び感覚で体力や思考力を養っていく方法はとても効率的だと思います。それらをいかしながら遊んでいる園児たちをみて、僕は感心しました。園児たちと一緒に会話したり遊んだりすると、新鮮な発見があり、考えること、気付くことが多くありました。

そんな中、トラブルもありました。一番印象に残っているのは園児がお漏らしをしてしまったときのことです。もちろんお漏らしを処理することも保育士の仕事の一つなので、僕も手伝いました。子どもたちを喜ばせるために自分たちは仕事をしているんだ、という気持ちで取り組み、こんな仕事はいやだと思う気持ちを自分で打ち消しながらやりました。他にも四方八方から園児たちが絵本をせがんできたときや、寝かしつけをせがまれたときなども大変でした。そして、それらが同時にきたときはどのような順番でこれらをやっていけばよいのかわからず、かなり困りました。けれどもこのようにせがまれるときは同時にうれしい気持ちも強く、僕にとっては楽しい思い出の一つとなりました。

最終日の五日目には、もう自分から笑いをとるまでになりました。しかし、この日はなんとなく切ない気持でした。園児たちが昼寝をしている間にする、細かくて集中力が必要な仕事が、いつもより大変に感じました。そう、この日は園児たちと別れる日です。切ない気持ちでも、この日は特に気合いを入れようと思って、園児たちと接する貴重な時間を大切にしました。いつもより多く園児たちに話しかけ、園庭で遊ぶ人数や内容も意識的に多くしました。最後に仕事から帰るときも、各クラスを巡回してから帰りました。この五日間の思い出をいつまでも僕の記憶に残すために。

職業体験は大変でしたが、園児たちと遊んだり、絵本の読み聞かせや昼寝の添い寝をせがまれたりして、本当に楽しいものでした。そのため疲れはあまり感じませんでした。五日間がとても短く感じました。短くても楽しくて充実していた五日間でした。それも先生方や園児たちのおかげです。僕は感謝の気持ちでいっぱいです。今回の体験で自分の将来に自信が持てるようになった気がします。今回得た知識や経験は、きっと将来役立つだろうし、役立てていきたいと思います。



職場体験

大田区立馬込中学校　三年
中宮健吾

二年生の三学期に僕は西馬込駅近くの「とんかつ・たくま」という飲食店に職場体験に行きました。

そのお店は店主の詫間さんとお子さん、そして詫間さんのお母さん（みんな「おばあちゃん」と呼んでいました）の親子三代で営んでいる小さな、けれどもすみずみまで手入れが行き届いた店でした。初めてご挨拶に伺ったとき、きれいに清掃された床と、とんかつを揚げた油の匂いが強く印象に残りました。

職場はいつもにぎやかで温かい雰囲気に包まれていました。お客様も僕がお茶をお出ししたときに「ありがとう」と笑顔で言ってくれました。それがとても嬉しくて、体験期間中の励みでした。

また職場の三人の方もみなさん親切で、何をすれば良いか分からずに、ただ戸惑っているだけの僕に仕事を一つ一つ丁寧に分かりやすく教えてくださいました。おかげで最終日にはある程度の仕事をこなせるようになったと思います。

皿を割ってしまったり、お茶をこぼしてしまったりと、失敗をしてしまったときもあったけれど、そのときは「一生懸命頑張っているから失敗もあるんだよ」と慰めてくださいました。失敗してしまったことは申し訳なく思っていますが、詫間さんのその言葉が嬉しくて、失敗を取り戻そうという気持ちになりました。

体験初日、何をすれば良いのか分からなかった僕は、早く仕事ができるように、とにかくいろいろなことを聞きました。朝最初の仕事は清掃。お客様が来たらお茶を出し、料理を作る。お客様が帰ったら台拭きでテーブルをきれいにし、座布団を整え、皿を洗う。聞いただけでは簡単そうに思える仕事でしたが、実際にはとても大変でした。特に料理は全くしたことがなかったので、なかなか包丁にも慣れず上手くいきませんでした。でも清掃などの自分にもできそうな仕事については必死に頑張りました。そして初日で仕事の大まかな流れは覚えました。また僕の通っている中学校の卒業生でもある詫間さんと、現在の中学校の様子を話したりして楽しくコミュニケーションをとることができたので、職場体験前にあった不安は無くなりました。

二日目は初日よりも仕事が増え、達成感を覚えた一方、疲労も増えました。この日は特にお客様が多くて、定食に添える大根のぬか漬けを切っていたので、ずっと立ち続けです。おかげで少しは包丁の扱いにも慣れましたが、今まで経験したことのない疲れを覚えました。

その日の昼食には、詫間さんが買ってきたタコを出してくれました。詫間さんは美味しそうにタコを食べる僕を見て、少し微笑んでから「共食いだな」と冗談を言って笑いました。僕も笑いました。笑うと同時にそれまでの疲れがとれていました。

三日目の水曜日、この日はお店は定休日だったので、学校

でお店のＰＲポスターを書きました。何も知らず全然役に立たない僕を温かく迎えてくださった三人に感謝して、心をこめて描きました。もしかしたら今まで僕が描いた絵の中で、最も丁寧に描いたものかもしれません。

次の木曜日には、いつもの床清掃だけではなく、窓の清掃も頼まれました。お店には小さな窓がいくつもあり、思ったより時間がかかります。開店時間に間に合うよう頑張りました。清掃が終わった後、詫間さんが「おお、きれいになったなあ」とほめてくださいました。頑張って良かった、と心から思いました。

そして最終日、これで職業体験も最後かと思うと、とても早かった気がしました。そしてなぜか少し寂しい気持ちもありました。この日になると仕事にももうだいぶ慣れていて、特に指示を仰がなくても自分で判断して動けるようになり、準備などの時間も短時間で済ませることができました。

この日の昼食はカツ丼でした。やっぱり詫間さんは僕をみて笑っていました。

帰り際に「家族に」といって詫間さんが五人分のとんかつをくださいました。職場体験でお世話になっている上に、お土産まで渡されて僕は戸惑いましたが、詫間さんの笑顔を見たら、自然に手を伸ばしていました。

そして最後の挨拶です。僕は四日間の感謝を込めて「ありがとうございました」と頭を下げました。その言葉に詫間さんが「ごくろうさん」と言ってくれました。この「ごくろうさん」は、いつもの「ごくろうさん」とは少し違って聞こえました。

社会の厳しさ

練馬区立三原台中学校　三年
鈴木拓真

村上龍さんは、著書「十三歳のハローワーク」で、「仕事はわたしたちに、生活のためのお金と、生きる上で必要な充実感を与えてくれる」と述べています。

僕は現在、中学三年生の進路選択という、とても大事な時期を迎えています。自分は将来どのような職業につき、どのような生活を送るのか、ということを考えているのです。「生きる上で必要な充実感を与えてくれる仕事」をみつけなくてはいけません。それは、何か月も、何年も続けても平気でいられる仕事でなくてはいけません。つまり自分に向いた仕事、自分にぴったりの仕事でなくてはいけません。

大企業でも、倒産したり、借金を棒引きにしてもらったり、税金を注入してもらったりする会社がたくさんあります。そのため、昔より会社に就職するのが難しくなっています。

このような苦しい状況になった社会で生きていくためには、自分に向いた仕事を見つけ、そのために早い段階から準備をしていかなくてはなりません。そして、よりよい生活を送っていくためにも、一生懸命努力することが必要だと思います。僕もしっかりと自分に向いた職業を見つけていきたいです。

そのための方法として、いろいろなものに興味をもち、チャ

レンジすることで、自分の好きなことを見つけるということがあります。

僕の通う学校では、一年生の冬に、様々な職場に行き、その職場の仕事を体験する「職場体験」が毎年行われています。

僕は、「江戸からかみ」という伝統工芸品を作っているお店にいき、職人の仕事というとても貴重な体験をすることができました。からかみとは、平安時代に中国から日本に伝わってきたもので、「唐紙」とも書きます。ふすまや障子の一番表に張る、模様のついた紙のことです。

江戸からかみの一日の仕事は、専用の紙に着色料を使って模様をつけること、ふすまのデザインを考え、作成することなどです。その人のセンスが問われるので、とても大変です。しかし、他にもたくさんの仕事があるので、しっかりと計画を立てて、テキパキと働かなければいけません。僕は紙に模様をつける作業を体験することができました。この作業の手順は、まず初めに模様のデザインを選ぶことから始めます。模様のデザインは、木の板に彫ってあり、好きな模様の板を選ぶのです。次に、模様の色を選び、その色の着色料を板に塗ります。そして、紙をその板にゆっくりと押し当て、版画のようにして模様をつけます。簡単そうな手順ですが、少しでも紙と版画をずらしてしまうと失敗してしまう作業なので、とても緊張します。このように、からかみの仕事はとても大変で忙しい職業なのです。また、長時間の集中力や、長年の経験も必要とされる職業です。一人前のからかみ職人になるためには、とても厳しい修業が必要です。江戸からかみの職人さんも、中学二年生の時に弟子入りして、五十年もこの仕事を続けているそうです。

僕はこの職場体験で、社会や職業の厳しさがよく分かりました。この貴重な体験は将来絶対に役に立つと思うので、大切にしていきたいです。また、この進路選択にも役立てていきたいです。そして、何年もずっと続けていけるような、自分に合った仕事を見つけたいと思います。そのためにも、社会の様々なものに興味をもち、何事にも挑戦していくようにしたいです。

今、職場体験をふり返って考えた事

練馬区立三原台中学校　三年
柿﨑亮太朗

たまに親の買い物に付き合ってデパートに行った時、退屈でつまらない所だと思っていた。そんな僕が中一の職場体験で西武デパート池袋店に行くことになった。友達に誘われたからだ。あまりデパートという所が好きではなかったので、デパートとはどんな所でどんな仕事があるのか（いろいろな物を売っているというのは当然知っていたけど）よく分からなかった。

失礼な話だと今になっては思うが、職場体験の当日も僕はちっとも楽しみではなかった。当日の朝、デパートの地下一階にある改札口の近くの入り口に担当の人が待っていてくれた。子供の僕達に対しても「さすが」という感じのあいさつ

を丁寧にしてくれたのが、今でも印象に残っている。その後、デパートの隣りにあるビルに連れて行かれた。そこでその日の予定についての説明や、注意点などを聞いた。そしてその後、店内を案内してもらった。僕は地下の食料品売り場や、おもちゃ売り場、子供服売り場、その他は父や母の洋服売り場位しか行った事がなかったが、家具や食器、布団やパジャマなど、たしかに百貨店というだけのことはある。何でもそろっていて、無い物は無い様だった。昼食を先程のビルで食べた後、また店内を見学させてもらって、職場体験初日が終わった。

二日目は、昨日見る事のなかった、デパートの裏側を見せてもらった。ダンボールが大量に積んである通路や、デパートで出た残飯を利用して肥料を作っている所も見た。その肥料は西武デパートが契約している畑に運ばれて野菜が作られるそうだ。社員食堂も見せてもらったら、とても広くてショッピングモールのフードコート位あるので、びっくりしてどれだけの人が働いているのだろうと思った。その他にも、商品が運ばれてくる駐車場や、普通の事務所の様な所も見せてもらった。昼食は会議室で食べさせてもらった。ここで新しい商品についてや、経営についてなど、話し合われるのだろうかと思った。昼食後はギフト用の箱の包装の仕方を教えてもらった。僕は不器用なのでとても苦労したが、何回も練習してなんとかできる様になった。その時もらった畳み方の書いてある紙を僕は今でも大切に取ってある。そしてその後、とうとう売り場に出してもらえた。紳士服売り場のハンカチを売っている所で、ハンカチを畳んだ。平日だったせいか、全然お客さんが来なくてちょっとがっかりだった。時間はあっという間に過ぎて、こうして僕の二日間の職場体験は終わった。

何の期待もしていなかったデパートでの職場体験だったが、終わってみると僕はかなり楽しんでいたし、発見が沢山あった。色んな物を売っているだけだと思っていたが、その裏でそれを支える沢山の仕事がある事を知った。肥料作りや、社員食堂で働いている人も大切なデパートを支える人達だ。その後も何回か僕はデパートに行ったが、たった二日で僕はすっかり西武デパートびいきになった様だ。これはあのダンボール通路から来たんだなと思ったり、前は気付かなかった店員さんがスタッフ専用出入り口に入る時、おじぎをする事なども発見したりした。

実は僕は以前、勉強するのが嫌で、高校へは行かずにコンビニなどで働こうかな、なんて甘く考えていた。コンビニで働く人に大変失礼な事を考えていたものだ。僕は父の仕事の内容も本当の所はよく知らない。仕事についてしっかり考えた事がなかったからだろう。幼稚園の頃は、宇宙飛行士になりたいとか、恐竜の骨を探したい、なんて考えていたけど、今は何をしたいのかもハッキリしない。職場体験に行って、単純に思える仕事でも、色んな苦労やコツがあり、チーム一丸となって行なわれている事を知った。一言でデパートの社員といっても受持ちによって職種が全然違ってくる事にも気付かされた。この先僕は職業を選択する事になるが、その為には色んな職業について知りたいと思った。全然興味のなかったデパートも、知ればおもし

ろいと思った様に、まだ僕の知らない職業の中に興味深い仕事があるかも知れないからだ。

来年高校生になったら、僕はアルバイトをしようと思っている。アルバイトをする事によって社会を知り、仕事をするとはどういう事か体験できるだろうと思うからだ。西武デパートで僕達を案内してくれた方は、チーフトレーナーという肩書きで、自分の仕事に誇りを持っている様だった。デパートを案内しながら、誇りや愛社精神といったものが伝わって来た。父も時々家で仕事の電話をしている。顔付きが変わって、真剣な顔で手帳や書類を見ながら指示を出したり、連絡をしている。僕もそんな大人になれるだろうか。今から色んな職業について知り、自分に合った、誇りをもって出来る仕事につける様、少しずつ準備していきたいと思う。

私の将来の夢

足立区立第六中学校　三年
渡邉美幸

私の将来の夢は保育士です。

今、家庭科の授業で幼児について学んでいます。私は子供が大好きなので、この授業内容がとても楽しみでした。そして最近この授業内容に入り、毎時間、毎時間幼児について学んでいくうちに、だんだん保育士になりたいという思いが強くなっていきました。

家庭科の授業では、幼児や児童の一日の生活についてや、幼児が遊ぶおもちゃの大切さや、おもちゃの選び方など、なるほどと思うようなことがたくさんありました。そして今は、幼児が遊ぶおもちゃを作っています。布を一つ一つぬい合わせてボールを作っています。布を使うとぶつかっても痛くないし、安全に遊べるなと思いました。幼児が安全に遊んだり、生活できるようにするには、幼児の気持ちになって考えることが大切だなと思いました。

そして、私は中学二年生の時に職場体験に行きました。もちろん体験先は、保育園です。私は、自分が卒園した保育園に行きました。私が卒園してから、かなりの時間が経っていたので、園長先生も変わっていたし、先生方も皆変わっていました。

一日目に行った時、園長先生や先生方がとても優しく接し

てくださり、保育園で働いている皆さんはとても優しくて、いい人ばかりだなと思いました。そして、自分の担当するクラスに行くと、初めは、園児達が見ているだけで近づいてくれず、不安でしたが、時間が経つと慣れてきたのか一人の園児が、おままごとの食べ物を持って来てくれて、

「あげる。」

と、言って私にくれました。この瞬間、本当に嬉しかったです。こうして、一人の幼児と遊んでいると、みんなが来てくれて遊ぶようになりました。私は、二才児を担当していて、二才児の子の中には、鼻水やよだれが垂れてしまう子もいました。そんな時、保育士さんは、拭かなければなりません。私は、こういう作業が正直嫌だなと思ってしまう時もありましたが、子供達の笑顔を見ると、とても幸せな気持ちになりました。

二日目になると子供達が、

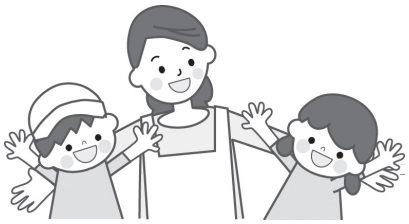
「先生、先生。」

と、口々に呼んでくれるようになり、たくさんの子供達と接することができました。公園に行く時は、子供達と手をつなぎ歩いていきました。いつも一人で歩いている時より、緊張感をもって歩きました。それは、子供達の命を背負っている仕事なのだと思ったからです。軽い気持ちでこの仕事はしてはいけないなと改めて実感しました。

最終日は、皆とたくさん遊ぶことができ、とても充実していました。

子供達がお昼寝している間にも、保育士さん達の仕事はたくさんあります。お母さん方に見せる連絡帳に子供達の様子を書いたり、子供達が工作などで使う材料を作ったり、休む時間は本当に無いなと思いました。私は工作で使う材料作りの手伝いをしました。私は、六月に行ったので、七夕で使う織姫と彦星を作りました。子供達が顔を書けるように、折り紙で子供達の人数分作りました。先生と二人で本を見ながら作りました。三日間かけて完成した時は、達成感があり、本当に嬉しかったです。子供達が笑顔で使ってくれたら嬉しいです。そして、夕方には一階に下りて、六時まで残っている子供達と遊びました。三日間のうち一日は、三歳児から五歳児の世話をしました。いつも二歳児を担当していたので、三歳児から五歳児を担当した時は、本当に大変でした。歳が少し変わるだけで、遊び方もこんなに変わるんだなと実感しました。

私は、家庭科の授業と職場体験をやってみて、さらに保育士になりたいという思いが強くなりました。私は、保育関係の授業が学べる高校に入り、専門学校に進んで資格をとって、保育士になる。この目標に向かってがんばっていきたいです。



保育体験

足立区立第七中学校　三年
齊藤未来

私は、今年の夏休みを利用して、学校の保育体験に参加しました。

保育体験は、実際に保育園に行き一人一クラスを担当し、一日仕事を体験するというものです。

私は妹や弟が居ない上に、担当が二才児のクラスだったため、体験中は戸惑う事ばかりでした。一番困ったのは、子供達の言っている事の意味が分からなかったり、逆にこちらの言った事が子供に伝わらなかったりと、コミュニケーションが取りづらかった事です。

そんな時、保育士さん達は分かりやすい言葉で身振り手振りも入れながら、子供と会話をしていました。私もそれをまねしてみると、最初よりも上手に会話をすることが出来、子供と接する時は、子供の立場に立って工夫する事が大事だという事がよく分かりました。

保育士さんの仕事は、子供達の世話だけではなく、プールや床の掃除などの事も子供達のお昼寝の時間にしなければいけません。私の担当は床に敷いてあるマットの掃除で、屋上で炎天下、他の研修生も含め合計五人がかりで一時間半かかって、ようやく洗い終える事が出来ました。腰も痛くなってしまいくたくたになりましたが、いつもはそれを、二人だけで掃除しているそうです。

それだけでなく、私達の休憩している間にも、子供達一人一人の「帳面」という、その日一日の様子を伝えるものを書いていました。疲れていない事にも驚きましたが、一番驚いたのは、一人一人をすごくよく観察しているという事です。帳面には、その子が何をどのくらい食べて、どれをおかわりしていたか、せきをしていたかだけではなく、どのおもちゃでどのくらい遊んでいたかというところまで書かれていました。何十人も居る中で、一人一人をしっかり見るのは、とても難しい事だと思います。どうしてそんな事が出来るのか不思議に思ってしまうくらいでした。

体験中には、他のクラスの赤ちゃんが初めて歩く瞬間も見る事が出来ました。毎日その赤ちゃんのお世話をしている保育士さんは、とてもうれしそうな顔をしていました。このような、子供の成長を見る事が出来るのも、保育士さんの仕事の楽しみなんだなぁと思いました。

私がうれしかったのは、帰る時に子供達が「ありがとう」と言って手を振ってくれた事です。これだけで、一日がんばって本当によかった、と思う事が出来ました。

私は、たった一日だけで、帰る頃にはくたくたになってしまいました。働いて疲れるのは、どの仕事もきっと同じだと思います。私はこの体験を通して、両親が毎日働いてくれるおかげで、普通に生活する事が出来るというありがたさも感じる事が出来ました。

また、保育士に対する仕事のイメージも、このたった一日で大きく変わり、私の思っていたよりもずっと大変で、その

分すごくやりがいのある仕事だという事がわかりました。
この事は、実際に体験しなければ分からなかった事だと思います。
この一日は、私にとってとても貴重な一日になりました。また、私が今回の体験で一番感じた事は、子供が本当に好きでなければ、出来ない仕事だということです。自分にとって、やりがいのある、頑張ろうと思えるような仕事を見つける事の大切さを改めて実感しました。
私は、まだ将来自分がどんな仕事をしたいのか決まっていません。でも、今回の体験を終えて、少しずつでも自分のやりたい事を、見つけていきたいと思えるようになりました。いつか、自分のやりたい事が見つかった時、いつでもその仕事が出来るように、今は受験勉強を頑張りたいと思います。また、これからも職場体験などには、積極的に参加して行きたいと思います。

日陰の鑿（のみ）

江戸川区立鹿骨中学校　三年
眞利子雅貴

僕の将来の夢は宮大工です。僕は小さい頃から物を作るのが好きでした。紙をはさみやカッターを使って好きな形にすることがとても楽しかったです。成長するにつれてもっと大きなものが使いたくなり彫刻にチャレンジしてみました。彫刻はとても楽しくてすぐ大好きになりました。一枚の板から自分の好きなものをほりだすことはとてもおもしろいです。中学校に入学してからは部活や勉強のあい間は常になにか作ったり描いたりしていました。正直に言うと勉強より工作をしている時間が長かったと思います。この頃の夢は宮大工ではなくバスの運転士でした。自分の体の数倍もある乗り物を動かしているバスの運転士さんがあこがれでした。
それが宮大工に変わったのは中学二年のときです。二学年全体の遠足で鎌倉に行きました。鎌倉には、家族とも何度も来たことのある場所なので僕は大好きです。鎌倉には、鎌倉時代から残るとても貴重な寺社が多くありわくわくします。数回きたことのある寺や神社だとただ「大きいなあ」「すごいなあ」で終わるのでなくその建て物の（影）となる部分が知りたくなります。影というのは、ただその建て物がつくる日陰でなく、その建て物を造った人やそれを今につなげている人たちのことです。ふだんならそんな人たちの存在は考えもしませんがとても歴史を感じさせるものにはやはりそういった人たちの努力が感じられるのです。
日光東照宮では今、数年にわたっての大修理が行なわれています。僕が行ったのは中学一年の時ですが、その頃は本殿や宝物殿の色塗りをしていました。今の絵の具ではなかなか出ない色をした塗料を筆でこまかく塗っていました。色を塗った上からさらに花びらなどのしわや鳥の羽などを一ミリほどの線で描いていました。僕はその時、「こういう技術を持った人たちによって数百年も前の建て物を僕たちは見ることができるんだなあ。」と思いました。

鎌倉の鶴岡八幡宮では日光と同じようにこまかい細工がされていました。花や鳥や獅子など今にも動きだしそうです。僕はそんな芸術といえるこれらの建て物を見て感動します。その感動も宮大工さんなどの人たちによって昔から今へ受け継がれてきたものの力です。そんな感動を未来に、こんどは、自分が残して行きたいと思いました。

そうして宮大工という職業にあこがれていたちょうどその頃、テレビのある番組で飛鳥時代から続いているある宮大工集団のことを知りました。始まりは聖徳太子が都に今までよりもっと大きく豪華な寺社を建てるために大陸（今の中国）の宮大工たちを日本によんで技術を広めたことだそうです。それを知ったとき僕は、「飛鳥時代！　聖徳太子！　すごくかっこいいじゃん。」と自分一人ではしゃいでしまいました。あこがれが目標に変わりました。僕たちがふだん、「京都といったら金閣寺でしょ。」とか「やっぱり清水寺は大きいよね。」などとなにげなく会話に出てくる国宝や世界遺産などを自分が守り、関係していくと思うと、なんだかわくわくしませんか。僕にとって一番あった仕事は宮大工だと思います。

でも僕は宮大工をなめているわけではありません。技術を自分のものにするためには、十年は修業しないといけません。その十年間は宮大工の先輩方のもとで自分から技術をぬすむことをしないといけないのです。僕はその十年で自分をきたえたいです。力や体力だけでなく精神面でも男らしくなりたいです。

僕にはこれから入試という大きな壁が前にあります。その壁をのりこえてから工業高校で三年勉強して、高校を卒業したらすぐに宮大工になるため修業します。

これが僕のこれからの挑戦です。仕事をすることはとても大変なことだと思います。本当の大変さはまだ体験していませんが、自分の好きな職につけたら最高だと思います。今の目標は宮大工ですが、高校三年間で変わるかもしれません。でも、どんな夢でも最後までやりきることが大切だと思うので頑張ります。

最後に、もし本物の宮大工職人になれたら日本の建て物、寺社をとおして日本のよいところを外国の人にもわかってもらえるよう努力を重ねていきたいです。

高等学校の部　最優秀賞

一生ものの免許

愛国高等学校　衛生看護科　三年
矢作彩香

「ごめんなさいね。」

その患者様の一言がいつも胸に引っかかっていた。私が受け持たせて頂いた患者様は経過的には回復に向かっているが、床上安静が強いられていた。床上安静とは病室内ならなんとか動いたり出来るがたいていはベッドの上で全てのこと済まさなければならない。衣食住という基本生活の全てを四人部屋の病室で行わなくてはならない。私達が普段当たり前に思っていることが出来なくなるのだ。

私達学生は実習をさせて頂いている。自分たちの夢、目標である看護師になるべく、環境を整えているのだ。そのための仕事は勉強として苦労とは思っていない。けれど、私の受け持たせて頂いている患者様はディスポータブルトイレのバケツを流しに行くたびに、

「動けないから…ごめんなさいね。」

と少し悲しげにぼそっと言う。それを聞くとなぜかグッと胸が痛くなり、何にも言えないまま「はい、大丈夫です。」としか言えなくなってしまう。患者様が原因ではなく、病気が原因なのにどうして毎回気を遣わなくてはならないのだろう。更に患者様のベッドは大部屋で、廊下側にある。今日はどんな天気だろうかと外の景色を眺めることも用を足したときに換気をすることも出来ない。ディスポータブルトイレが病室にある患者様にとってベッドが窓側にあるということはとても大きい。何か私に出来ることはないだろうか・・私なりのアイディアは消臭スプレーを利用することだった。以前患者様とコミュニケーションを取っていたときに好きな匂いはレモンとおっしゃっていたのを思い出し、お手製の消臭スプレーを作ろうと思い立った。その夜、実習中の記録、学習とある中、材料を買いに出かけたりして完成させた。とても忙しかったがそれでも充実していた。次の日、指導者さんにその完成品を見せると、

「ちょっと待って、保留。」

と言われた。え?どうして?と心の中で驚きを隠せない。心がこだまする。なんで?どうして?せわしなく理由が聞きたくなる。指導者さんは言葉を選びながら説明してくれた。

「確かに消臭スプレーは一つの手かもしれないね。でもすぐ消臭スプレーと結びつけるのはどうだろうか、もしあなたが患者様と同じ立場で『用を足したら使ってください。』とスプレーを渡されたらどんな気持ちになるだろうか。私が気にする以上に周りの方が臭気を気にしているのでは、とショックを受けてしまうかもしれないね。」

私はハッとした。その日の夜は涙が涸れてしまうのではないかと思うくらい泣いた。自分が情けない。気を遣わせないようにと考えた結果は逆に気を遣わせて、自由を更に奪うところだったのだ。どうしていつも一つの方向からでしか見られないのだろう。もう私には看護師は向いていないのではな

いかと考え始めた頃、母が枕にうずくまる私の前にそっと座ってこう話し掛けた。

「まだまだ始まったばかりでしょ。出来なくて、考えが浅いなんてみんな承知の上、でもね、みんなそうやって一歩ずつ一人前になっていったのよ。出来ないことや考えられないことを恥じることはないからね。一生もんの免許だもの、そんなに簡単に取れないわよ。沢山苦しんで、泣いて最終地点で沢山考えることの出来る看護師になればいいのよ。」と。母の重く深みのある言葉を聞いているうちに、だんだん気を取り直し、もう一度前に進んでいこうと思えた。

そうだ。まだ私達は始まったばかりだ。そしてこの道を進む限りゴールなんてない。看護とは変化を続けるものだから、終わりなんてない。一生ものの免許だ。「看護の世界」は私にとってとても奥深く成長して止まない世界だ。だからこそ悩むし、問題にぶつかる。けれどそれでいいんだ。一人前の看護師に一歩でも近づくためにまた明日も頑張ろう。大切なのは逃げないこと、目の前の実習がすべてではなく、次につなぐための実習でもあるのだということを忘れず、一歩、一歩進んでいこう。一生ものの免許なのだから。

高等学校の部・最優秀賞の矢作彩香さん

高等学校の部　優秀賞

精神看護実習

愛国高等学校　衛生看護科　三年

田中みのり

「あなたは体の痛みと心の痛みのどちらの方が辛いと思いますか?」

私はこの問いに答えることが出来ません。お腹が痛い、怪我をして足が痛いなどの体の痛みは経験をしたことがあるので、どの程度の痛みなのかはわからなくても想像するのは容易です。しかし、心が苦しい、心が痛いなどの痛みはどのような痛みなのかを感じ取ることはなかなか出来ることではないと思います。このように、目ではみることの出来ない心の問題に向き合い、患者様の不安や苦しみを軽減し、その人がその人らしく生きられるように援助するのが精神看護です。

私は看護科に入った頃から精神看護に興味がありました。以前から心理学が好きだということもあり、知りたいと思ったのです。そして、ついに臨床実習で待ちに待った精神科の病院に行くことが出来ました。少ない実習時間の中で出来るだけ多くのことを学びたいと思い、心を奮い立たせました。

実習初日はオリエンテーションだったので施設の内外を見学して回りました。精神科の病院は一度も見たことがなかったので、少し暗い所をイメージしていましたが、病院の中は今までの施設と変わらず、庭にはたくさんのバラが美しく咲

いていてとても落ち着いた病院だと思いました。

しかし、今までの施設とは明らかに違うのが、ドアの全てに厳重な鍵があるということです。開放病棟と閉鎖病棟があり、開放病棟は患者様が自由に庭に散歩に出たり自動販売機に行くことが可能ですが、閉鎖病棟は必ず、鍵がかかっており、患者様が外に出ることは出来ません。開放病棟の中を見渡すと患者様は実にさまざまでした。普通にテレビを見ている方もいればひたすら廊下を歩いている方もいます。床に座り込んでいる方やずっと呻き声を出している方もいます。病棟内を歩いている際にじっとこちらを見つめる患者様の視線に緊張しましたが、挨拶をすると、お辞儀が返ってきたので少しホッとしました。

私が受け持たせて頂く患者様は第一印象がとても優しくて、挨拶をすると

「よろしくね、みのりちゃん。」

と温かい笑顔でおっしゃってくれました。私は幸せな気持ちで家に帰り、次の日からの楽しい実習に胸をふくらませました。

しかし翌日、事態は一変しました。きっかけは些細なことです。起床時間を過ぎていたので患者様に声をかけたところ、「昨日眠れなかったのに！」と不愉快な気分にさせてしまったのです。今思えばここで眠れなかった理由などをじっくり聞くべきだったと後悔しているのですが、起こすように指導を受けたので起きて貰うことだけを考えて必死になって声をかけていたのです。なんとか患者様は目を覚ましてくださったのですが、その後はショックの連続でした。「今日は暖かいですね。」と声をかければ「寒い。」と言われ、「この写真、見てもいいですか？」と尋ねると「だめ。」と即答。シーツ交換をお手伝いしても「あなたは下手ね。」と鼻で笑われる。患者様は昨日の優しい笑顔からは想像もつかないような目付きに変わっていました。最初のうちは「気にしない。気にしない。」と自分に必死に言い聞かせていましたが、ついに耐え切れなくなり、涙が溢れ出てしまいました。止めようと思っても患者様の表情が頭の中に焼き付いて離れず、一人トイレに籠もってしまいました。指導の看護師の方や先生が「ここの患者様は感情や態度の起伏が激しく、またすぐに態度が変わるからあまり左右されないようにね。」とおっしゃって下さいました。ここで入院している患者様のほとんどが統合失調症という病気です。症状としてはさまざまな妄想や幻聴、感情鈍麻、特有な人格変化などがあります。こういう疾病なのだということは分かっているつもりでした。しかし前日からの態度の豹変ぶりは簡単に受け入れられるものではありませんでした。

その後は他の患者様方と折り紙を楽しみましたが、その間にも担当の患者様のことが頭を離れることはありませんでした。けれど、もう一度話しかける勇気はありませんでした。次の日は閉鎖病棟に行く予定となっていたので、患者様とはまともに話が出来ないままついに最終日となってしまいました。本当は最後なのでたくさんお話がしたいと思っていたのですが、「また冷たくされたらどうしよう」という不安が消えず、顔を合わせることを避けていたのです。そんな私を見かねた先生が半ば無理矢理患者様のところに連れて行きまし

た。私は黙ったまま先生と患者様の話を聞いていたのですが、そのうち少しずつ口をきけるようになりました。すると患者様は以前のことなど忘れたように明るく接してくださったのです。むしろおかしいぐらい私に甘えてきてくれたのです。廊下を歩く際には手を繋ぎ、座った際には肩にもたれかかってきてくれました。私は先日との態度の変わりように驚きを隠せませんでした。でも私にとってそれは飛び上がりたいほど嬉しかったのです。また患者様と話すことが出来て良かったと心から思いました。

私の精神看護実習四日間が幕を閉じました。たったの四日間ですが、多くのことを学ぶことが出来ました。統合失調症という疾患は患者様一人一人がみんな違う症状です。患者様は日々変動が激しく、私は、最初冷たくされただけでこの方はそういう人なのだと思ってまいましたが、それは病気の症状や元々の性格などが複雑に絡んでいるからなのです。私は今回の実習を通して、自分が精神疾患について何一つ理解できていないということを痛感しました。心の病だけでなく体の病に対しても私にはまだまだ謎だらけです。これから人の痛みを理解できるような看護師を目指して勉強や実習に精を出したいと思います。

実習で学んだこと

愛国高等学校　衛生看護科　三年
渡辺　三紗

目を閉じると、あの時の記憶を鮮明に思い出します。実習最終日に患者様が目に涙を浮かべて、私が握った手を強く握り返し、

「ありがとう。立派な看護師さんになってね。本当にありがとう。」

と何度も何度も頭を下げ、お礼を言ってくださったあの時。

私は、中学三年の頃「看護師になる」という強い決意を胸に高校の看護科に進みました。あれから三年、私は看護科に在籍し、基礎実習を経験しました。二年間の看護の勉強を経て、今までに得た知識や技術を基に実際の病院に行き、患者様から学ばせて頂くのです。

そのときの私は、実習をとても楽しみにしていました。自分の夢へ一歩でも近づける大きなチャンスと考えていたからです。いつも学校の教室や実習室で学ぶ看護ではなく、実際の病院に患者様、どれも初めてのことでした。私達は、実習に向けて何度もケアの練習を行い、病院実習に望みました。

外は薄暗くまた人もいない道を、手先が凍り付くような寒さの中、病院へと向かいます。病院までは電車を乗り継ぎ、川沿いの土手を歩いて行かなくてはなりません。けれど土手を登りきると、まぶしいほどの朝日が私を待っていました。

私は、病院実習で患者様を受け持たせて頂けることをうれしく思っていました。一対一でお話が出来ること、今までの演習で学んできたことを実際に行えること、何もかも初めてのことです。

病院実習が始まり五日程たった頃、実習生一人に対して、患者様一人を受け持たせて頂けることになりました。私が受け持たせて頂く患者様は、肺がんの方でした。初めて受け持った患者様が「肺がん」。私は驚き、一気に自信を失いました。ご挨拶をする前に患者様の病気について、どのような状態なのか知る必要があります。患者様についてのデータベースをカルテから見ていきます。症状・治療法・検査結果など見ていくと、医師からご家族への説明の欄に「もう長くない。」とお話をしたことが書かれていました。

私は今からこの患者様を受け持つと思うと、不安で頭が真っ白になりました。疾患については患者様自身はわかっているのですが、これからどうなるのか、どのような経過をたどるのか、患者様には知らされていません。私は情報を取り終え、患者様に挨拶をするため病室に向かいました。

患者様は笑顔でとても優しい印象の方でした。明るく、一見病気をしているとは思えないほどでした。私は緊張のあまり、何を話してよいのかわからなくなりました。簡単な自己紹介をして挨拶を済ませ、病室を後にしました。けれど、このままではいけない、もっと会話をしようと思い直して、もう一度病室を訪れました。患者様はいやな顔一つせずに「どうぞ。」と快くベッドサイドの椅子に座らせて下さいました。始めは何も話すことが見つからずお互いに無言状態になってしまいました。しかし、だんだんと会話を重ねるうちにつれて、会話も弾むようになっていきました。そしてとうとう病気の話になりました。私はどんな顔をして、どのように話をしていいのかわかりませんでした。すると、患者様は

「私の病気はもう治らないからね。」

と苦笑いをしながら話されました。私は何も言えなくなってしまいました。しかし、沈黙が続いてしまえば患者様はもう本当に治らないと思ってしまう。私の対応の仕方で判断されてしまうと思い、少し考えてこう答えました。

「私は、まだ学生ですし、よくわかりませんが、そんなことないと思います。」

私にとって精一杯の対応でした。病室を出た後も本当にこれでよかったのかと悩みました。でも、どれだけ考えてもどの答えが正解だったのか、わかりませんでした。後で指導者さんに聞くと

「対応困ったでしょ。初めて会ったのに急にあんなこと言われて戸惑ったよね。私達でもどうすればいいのかわからないときがある。難しいよね。」

と慰めてくれました。そして、患者様が病気に対して闘病意欲を持ってくれることが一番大切なのだと教えて下さいました。

翌朝、朝のバイタルサインを確認しに病室を訪れました。患者様は不整脈を持っていて、早くなったり遅くなったりする脈をうまく測ることが出来ず、負担をかけてしまいました。患者様は苦しいはずなのに文句も言わず、私が出来るまで付き合ってくださいました。忍耐強い穏やかな態度は実習の最

後まで続きました。私は出来るだけ明るい会話をするように心懸けました。実習の終わりは思ったよりも早く来たように感じられました。最終日に私が患者様の手を握った時、その手を強く握り返して下さいました。その力強さに、私は患者様の生きようとする気迫を感じ、むしろパワーを貰ったような気さえしました。

今回、病院実習で私は貴重な経験をさせて頂き、さまざまなことを学びました。学校の演習で行った内容一つをとっても患者様はそれぞれの病気を持っていて、それぞれの患者様に合った方法・目的で行うことが大切だと実感出来ました。また、何より、患者様とのコミュニケーションの中で信頼関係を築くことがとても重要なのだと思いました。病気を克服したいという患者様の心とそれを支えたいという私達の思いが重なることが大切で、それが看護の第一歩だと思うからです。次の病院実習ではこの経験を活かしてより良い看護が出来るように精一杯頑張り、患者様に負けずに成長していきたいと思います。

経験を生かして

蒲田女子高等学校　一年
辻　明日香

私が、幼稚園の頃でした。いつも可愛いがってくれていた祖父が膵臓ガンで亡くなってしまいました。亡くなった人を見る事は何度かあったはずなのに、やはり身近だった祖父の死は怖くて近寄ることもできず泣いている親戚をただ見ているだけでした。ちょうどその頃、祖母の認知症は始まりつつあり、在宅介護の為に私達家族は、祖母の家に引越すことになり辛い生活が始まっていきました。認知症になる前はとてもしっかりしていて、よく遊んでくれていた祖母。でも、認知症になってからは、食事をとってもすぐに忘れてしまったり、私物をどこに置いたのか分からなくなっていき、それを幼かった私のせいにされてしまうことも多々あり祖母とのケンカが絶えませんでした。でも、それは、進行が始まったばかりの時で進んでくると徘徊が始まり真夜中でも祖母は外に出て行ってしまったり、祖父の仏壇にずっと手を合わせていて、幼いながら昔の祖母とは明らかに変わってしまった悲しさを感じていたのを覚えています。でも、それ以上、その倍くらいは、両親は悲しく思い本当に苦労していたと思います。父は、朝から夜まで仕事をして帰ってくると祖母の介護をし、母は丸一日、祖母と一緒に居て介護をし、ケンカになる度に間に入ってくれていました。そして、両親は毎日のように徘

徊に出てしまう祖母を探しに夜中も外に出たり、ずっと起きたりしていました。

当然、祖母は在宅介護ではもう手に負えなくなってしまってディサービスを利用し、その後、区で初めてできた施設に入所し、より良い環境を求めてその後、水戸の施設に入所しました。その施設では、月に一回必ず何か行事があり、私達家族は毎月かかさず行っていました。前の施設よりも広くて周りの環境も良かった為、家では見られなかった祖母の姿が見られて、月に一度は行けるのがとても楽しみでした。祖母が元気そうにしていると進行していないように見えましたが、着実に認知症が進んでおり、予想されていた家族の名前を忘れることが始まってしまい、とても悲しかったです。何時間もかけて水戸まで行っているのに祖母に自分達のことを忘れられてしまっては、意味のないような気もして行くのが嫌になる時もありました。でも、祖母の最後の時には、何とかもう少し生きて欲しいと思って手を握っていました。ケンカをしてしまったり、嫌だと思ってしまったりしてしまったけど祖母の死は悲しすぎました。

祖母の介護を見ているときは、『自分はなんて不幸なんだろう。』と思っていましたが、良く考えれば、幼い時にそんな辛い経験ができたのも祖母のおかげです。

よくニュースなどで介護疲れで対象者を殺してしまったと言うニュースがありますが、経験してない人からすれば『なんて酷い人だろう。』と思うかもしれませんが、私は辛さが分かるのでそうは思いません。

八年間、本当に辛かったけれどそれ以上に両親はもっと辛かったと思うし、またそれ以上に忘れたくなくても忘れてしまう、忘れていってしまう祖母が辛かったと思いました。

同世代で私と同じような経験をした人は、そう多くないと思うので、とても貴重な経験をさせてくれた祖母にとても感謝しています。

そして、幼い頃から凄く興味がある医療に将来は携わっていきたいと思っています。普通救命と上級救命も取得しているので、倒れた人がもし近くに居たとしたら誰よりも先に傷病者の人の命を救いたいと思うし、看護師になれたら普通の看護師になるのではなく、憧れのＥＲやＮＩＣＵに入りたいです。一刻を争う人が運ばれてくるので、チームワークがとても大切だと思います。私は、医療用語を覚えるのが得意なので医師が指示する前に準備ができているような医師みたいな看護師になりたいです。

また語学を学び、国際人道支援医師団にも参加し、医療設備が整っていないなかの医療も学び色々な国の人とかかわっていきたいです。

祖母が教えてくれた貴重な経験・思いを胸にこれからも人とは違う経験を常に求めていきたいです。

高校・専修の部優秀賞の皆さん

高等学校の部　佳作

社会福祉士になりたい理由

蒲田女子高等学校　一年
吉野美紀

私は、将来社会福祉士になる事が夢です。障害を持った人たちが、普通に働ける場をもっと増やしたり、生活していく上で不自由に感じる所を減らしていきたいと思っています。

なぜなら、私は幼い頃から周囲に病を持った子、身体に障害のある子がおり、その子たちが周りの子からいじめられている姿を見て来たり、学校で行った実習で知的障害者授産施設に訪れたことで「できない事もあるけれどできるはずのことまで不可能にしているのは私たち、何も知識のない人たちの偏見のせいではないか。」と思ったからです。障害がある人に対し、白い目で見たり、避けたり、逆に気を遣いすぎたりしてしまうことで生活しづらくなっているのではないだろうかと思います。また、実際に自閉症のある方が外で歩いている時に、少し変わった行動をしていたということで警察に通報されてしまうことが何度もあるそうです。最近は警察の方にも障害に対する知識が無い人が多いそうで、取り調べを受けたりしてしまうそうです。

もし、警察の人や通報してしまった人たちに少しでも障害を持っている人に対して関心があったり、知識があったりしたらどうなっていたでしょうか。困っていたら声を掛けて聞いてみたりできるのではないでしょうか。間違いなくすぐに警察に通報するということは無くなるはずです。別にたくさんの知識が無くても、ほんの少しだけの知識があるだけで変われると思います。少し関心があるだけで、障害を持った人もその家族も生活しやすくなると思うのです。障害を持った人に対する誤解はたくさんあると施設へ実習に行って感じました。会話も普通に出来るし、私たちと同じように仕事もできます。私たちとは違って一つの物に対してのこだわりが強かったり、人と話すのが苦手だったりする人がいますが、あとはあまり私たちと変わらないと感じました。私は、そういうことも社会福祉士になって伝えていきたいと思います。

障害を持っているから働けない、私たちとは違うといった事は間違っていると思います。少し苦手な事が多いだけで、私が訪れた施設では、バックを作ったり、公衆電話をきれいに掃除したりと出来ることはたくさんあるのです。障害を持った人は、その人なりに良い面が必ずあります。周囲の人たちが、それを認めてくれないと、理解を少しでもしてくれないと、障害を持った人たちの活動の場が制限されてしまいます。人は、何でも見た目で物事を判断してしまう傾向があると私は感じます。少し奇妙な動きをしていただけで、避けて通ったり、白い目で見たり、よくテレビなどでは、

「この子は普通じゃない。」

などというフレーズが聞こえたりしますが、最近私は、「皆が言う『普通』とは何だろうか。」と思うようになりました。なぜなら、人それぞれ基準が違うと思うからです。人が今日まで生きてきて、全く同じものを見て、聞いて、行動してい

るかといったらそうではありません。自分が生きてきた中で習得したものや学んだことは人それぞれ違うはずで、その人によって普通と感じたり、普通じゃないと感じたりすると思います。なので私は、普通というのは「生きていること」だと思います。同じ性格だったり、同じ生き方をしている人は、まずいないのですから、障害があるから普通ではないという考えは間違っていると思います。個性が人にはそれぞれあるように、障害も一つの個性なんだと思えば良いのです。そうしないと、いつまで経っても偏見というのは無くならないだろうし、障害を持った方たちも住みやすい社会というのは作ることができないのではないかと思っています。

そういうことを無くしていくためにも、私は様々な勉強をし、大学へ行き社会福祉士になって障害を持った人も同じように働いて暮らすことが出来るように援助をしていきたいと思います。

私の生きがい

蒲田女子高等学校　三年
田中史織

「生きがい」とは何だろうと辞書で調べてみたら「生きる張り合い」と書いてありました。私の張り合いと考えてみたら、家族旅行や好きな歌手のコンサートが浮かびましたがそれはきっと楽しみという部類で生きがいはもっと重たくてすごいものだと思うので、私がこれから出会うだろう生きがいについて考えてみたいと思います。

私は幼い頃、泣き虫の上、恥ずかしがり屋で、あまり自己主張が出来るタイプではなかったので、幼稚園の先生は私が上手く活動が出来るように面倒見てくれて、安心した環境の中で過ごすことが出来ました。その時の先生の笑顔や温かい手のぬくもりは今でも覚えていますし、今でも良い相談相手として連絡をとりあっています。そんな訳で、私が一番最初になりたいと思った仕事は「保育士」でした。そして実際に保育園や幼稚園にボランティアに行って色々な事を学びました。子どもはすごく可愛くて、時間が経つにつれて、なついてくれるので、本当に楽しくて幸せな気持ちになりましたが、私の場合はボランティアなので簡単なお手伝いだったので、単純にそのように思いました。実際は一人ひとりの個性を大切にして、成長をさせていく責任のある仕事で、子どもたちのお昼寝の間には連絡帳を書いたり、外出するときは怪我させない様、体調管理に気を配り、先生方の細やかな配慮はとても大変なものだと思いました。ですが、とてもやりがいのある仕事だし生きがいになる仕事だとも思いました。お迎えの時間になると、子どもたちは両手を広げてお母さんに飛びつきます。その笑顔は満面の笑みで、やっぱりお母さんにはかなわないなと思います。それは一人ひとりの子どもがお母さんにとっての生きがいだからだと思います。

その後、高校に入る時は保育か福祉で悩んでいたのですが、その当時は、祖父の具合が悪く少しでも役にたてたらと思い福祉を選びました。福祉では、施設に行ったりいろんな境遇

の方々と出会い色々なことを感じ、学びました。施設に行った際に私が緊張してしまい上手く会話が出来なかった時、利用者さんが気さくに声をかけてくれて逆に助けられたりもしました。そのうちに意志の疎通が出来るようになり「また来てね」と言われた時はとても嬉しかったです。

また、ピポ・ユニバーサルというイベントでは全く知らない方ばかりの中で障害を持った方々と一緒にマラソンをします。そんな経験をしたことが無かったのでどう接したらいいのか、不安でしたが挨拶・笑顔から始まり親しくなり、一つのゴールに向かって、みんなで力を合わせて走るのは一体感があり、とても満足感のある一日を過ごすことが出来ました。私がお手伝いをさせていただいた方々は自分の障害を受け止めていて、前向きに生きるために、それぞれの生きがいを上手に見つけていました。逆に力をもらったくらいです。祖父はもともと、とても活発な人でしたが、筋力が衰え出来ないことが増えていく中でも私の前では、決して悲観的にならず、前向きに家族が笑顔で居られるように過ごしていたと思います。祖父にとって家族の笑顔が生きがいだったのだと思います。私が今も思い出す祖父の顔は笑顔です。

私は今、人生の分岐点に立ち、将来の事を考えています。まだまだ未熟で助けてもらってばかりの私ですが、私はきっと人と関わる仕事を選ぶと思います。それは簡単な事ではないと思いますが、私自身が不器用だからこそ感じたいろんな思いは役に立つと思うし、お世話になった感謝の気持ちを返す事で伝わる思いもあると思います。その先に、この仕事を選んで良かったと思える「生きがい」に出会えたら良いなと思っています。これはもちろん、たくさんの努力が必要で、人としての成長がなければ手に入らないのかもしれませんが、仕事と生きがいがイコールになれたらと、憧れます。

そして、いつか結婚して家族を持つことになったら、満面の笑みでとびこんでくる生きがいを大切に育てたいと思います。

誰かのための私、私のための誰か

岩倉高等学校　商業科　三年
沼野　翔

ふと、考え込んでしまいそうになるときがあります。『私はなぜ、何のために働くのだろう』と。

私の通う学校はいわゆる鉄道学校で、私も鉄道会社への就職を夢見て校門をくぐった一人です。ですが、適性検査の結果、鉄道会社への就職を諦めざるをえなくなってしまいました。他の進路をまったく考えていなかった私の甘さもありましたが、周囲の友人たちが着々と進路への準備を進めていくのを見て、また焦りもあって考え込んでしまいがちでした。そんなとき、自分を奮い立たせてくれる体験がありました。

それは高校二年の夏、駅での職業体験の際の出来事でした。私は東京のターミナル駅に配属されたのですが、さすがは東京といわんばかりに様々なお客さまが途切れなく目の前の改札を通っていきました。呆気に取られている間もなく私のところへ次々にお客さまが尋ねてきます。

まだ覚えたての私鉄路線への乗り換えの案内を駅員の方の力をお借りしてなんとかこなしていました。

ちょうど一段楽したところへ目の不自由なお客さまがお連れの方とご一緒に改札の前までいらっしゃいました。そしてなんと目の不自由なお客様お一人で改札を通られたのです。近くにいた私にお連れの方が一言、

「ホームまで案内してあげてください。目が不自由なんです。」

と。そのときはあまり考えずにお引き受けしてしまいましたが、この後すぐに自分に課せられた責任の重さを痛感する事になります。

目の不自由なお客さまが声をかけてくださいました。

「新人さんですか。」

どうやら駅をよく使われているようで声で分かったそうです。

「はい、高校の職業体験に来ている者です。」

と、簡単に挨拶を済ませてご案内しようとしたときです。そのお客さまは私の腕を強く握ってこられました。

「痛くありませんか。すみません、目が不自由なもので、こうして掴まらせてください。」とお客さま。

「大丈夫ですよ。責任を持ってご案内します。」

と言った自分の言葉は自分自身にこれまでにない緊張をもたらしてくれました。『このお客さまは初対面の私に、全幅の信頼を置いてくださって、今私はこの方の命を預かっているんだ。』

お客さまを無事ホームまでご案内して

「ありがとう。もう大丈夫。助かりました。」

のお声をいただいて列車にご乗車されたのを見送ってから、とてつもない責任だったのだなと、鳥肌が立ちました。それと同時に今までにないやりがいを感じる事ができました。

今まで、運転士がお客さまの命を預かっている、という意識がありました。確かに、その通りなのは違いありませんが、それだけではなく、鉄道に携わる全ての人がお客さまの命を預かっている。そのことを痛感しました。

この出来事は私の価値観をがらりと変えるほど強烈なものでした。鉄道にかかわらず、全ての職は誰かのために存在しています。どの職についても、誰かのためになっているし、そこには大きな責任が伴います。当たり前のことではありますが、改めて思うと個人の果たす役割の大きさに驚きました。そして、私も誰かの責任のおかげで今日生活できているのかもしれません。

これで私の自問自答はひとまず落ち着きました。鉄道以外の働く意味を教えてくれたのもまた鉄道だったのは不思議な感じがしますが、この学校に入学して良かったと心から思える出来事でした。ですが、私には今もまだ将来就きたい仕事が見つかっていません。それを探すために大学へ進むことを決心したところです。そして今の自分に足りない部分を身につけつつ、自分にあった就職先を探していこうと思っています。私のために責任を全うしている誰かへの感謝とともに。

夢を実現した私を目指して

岩倉高等学校　機械科　三年
清宮　匠

二年半前の高校受験発表の日。私は小学生からの友人とハイタッチを交わした。私は幼いころからの夢である、鉄道の運転手になるため、都内にある鉄道に特化した岩倉高等学校に入学した。

地元であるさいたま市を飛び出し、右も左もわからない東京のど真ん中の学校での入学式は不安と緊張の連続だった。知っているのは小学生からの友人だけだった。どちらかというと内気な私は三年間先生やこれからできるであろう友人と仲良くやっていけるだろうか、などというマイナス思考が働いてしまった。

しかし一週間もすると、私の回りには同じ夢に突き進んでゆく友人たちがいた。その時、私はこの学校を選んで正解だと思った。

授業も実におもしろかった。数学や物理などという一般的な授業には飽き飽きしていたが、鉄道という自分が得意な授業や、電気や機械などの授業もとても新鮮だった。

一年生では、特に変わったことはなかったが、二年生になる前に鉄道実習という言葉を多く聞くようになった。鉄道実習とは鉄道を扱っている学校ならではのカリキュラムで、夏休みの数日間、実際に駅に立って駅員の仕事を体験してみようというものだった。特に出席義務はないが、将来鉄道関係で働きたい私としては願ってもない機会だった。そんな私を迎えてくれたのは東京の北区にある大きな駅だった。

駅に着くとすぐに仕事が始まった。おもな仕事は改札付近でのお客様の案内だった。

持ち場に着くとすぐに、

「S駅に行くには何番線ですか。」

という質問はもちろん、

「近くの地下鉄の駅に行くには、どのように行けばいいんですか。」

などという質問が山のように降りかかってきた。それを一つずつ丁寧に、そして笑顔ではっきりと答える。普段は人前に立つのが苦手な私だが、好きなことをやっているときは、苦手意識はまったく持たなかった。

実習も半分が終わり、慣れてしまったのか気が抜けてしまった私が、その日の持ち場につくと、近くにいた駅員さんから、

「やる気がないなら帰っていいよ。」

と言われてしまった。

胸に言葉の矢が思いきり刺さった気分だった。私はすぐに別の持ち場に移されてしまった。

「せっかくの機会なのに、なにやっているんだ。」

と自分自身を責めている暇もなく、仕事が次から次へと飛んできた。

その日の帰り道の途中の駅で、私の目の前に一人の駅員さんがいた。その人を見ていると、常にビシッとしていて、お

客様の質問も笑顔で丁寧に答えていた。
その時、私はさっきまでの自分自身を思い出した。駄目な私と、この駅員さんではなにが違うのか。
それは仕事に対する姿勢だとわかった。私はこの実習を単なる授業だと思っていた。しかし実際には、駅員さんと混ざって仕事をしている。
「これは勉強ではなく仕事だ。」
と私はそう思った。
「明日からは仕事をするという姿勢で駅に立とう。」
と強く自分自身に言いつけた。
翌日からは、今までよりも積極的にがんばった。なにをするにも自分から進んでやれるようになっていた。そうこうしているうちに実習は終了した。帰る道中、
「この実習は駅での仕事を学ぶことが前提だけど、本当の狙いは仕事に対する姿勢を身につける練習だったのかな。」
と思い、満足半分、悔しさ半分の気持ちで、自宅へ帰って行った。
それから一年経った今年の夏。私はあの夏の体験を忘れることはなかった。あの時の私にはならない、なってはならないと、強く思いながら、来たる秋の就職試験へ向けて着々と準備をしている。
全ては、好きな仕事に就いて、それに対して立派な姿勢で取り組むという人間を目指して。

「デザインする」ということ

東京都立忍岡高等学校　生活科学科　三年
小林愛奈

私の将来の夢はデザイナーです。もともとはパティシエになりたくてこの学校に入学しましたが、学校で色々な体験をしていくうちに、自分はデザイナーになりたいと思うようになりました。きっかけはいくつかありますが、その中で印象に残ったものは介護の授業です。
介護の授業の中で、「高齢者」を体験したことがあります。高齢者体験とは、お年寄りの体にかかっている負担を私たちの体に再現し、その状態で過ごしてみるということです。体や足にはおもりをつけ、手には自由に動かせないように固め、眼には白内障のゴーグルを掛けました。全身がズッシリと重くなり、まだ授業が始まったばかりなのに嫌になってしまったことを覚えています。その状態で文字を読んだり、物をつかんだり、友達に支えてもらいながら学校の中を少し歩いたりしました。普段あたりまえのようにしている動作を、こんなに苦痛に思ったことはありません。お年寄りの人たちが毎日どんな思いで日常生活を送っているのか、この授業で少しわかったような気がしました。
この授業を受けてから随分経ちました。しかし時折、この授業のことを思い出します。それはどんな時かというと、街中を歩いていてお年寄りや体の不自由な人のためにデザイン

されたものを見たときです。例えばノンステップバス、バリアフリーの床、すべりにくい階段の手すりなどです。すべりにくい階段の手すりは最近見つけたものです。普通ならまっすぐな手すりですが、その手すりはギザギザの形になっていました。なんでそんな形をしているのだろうかと思い、壁に書いてある説明を読んで納得しました。ギザギザだと手がツルっとすべることもないし力も入れやすいのだそうです。ちょっとした工夫ですが、お年寄りや体の不自由な人たち、そして私たちのことを考えてデザインされているんだなあと思いました。しかしきっと、学校で介護の授業を受けていなかったらこんな風に考えることはなかっただろうと思います。

介護の授業以外に印象に残ったことといえば、二年生のときの保健の授業です。自分たちで課題を決めてそれについてレポートをまとめるということをやりました。そのレポートで私は色覚異常のことについて調べました。前々からこのような人にはどんな風に世界が見えるのか興味があったからです。それに、お年寄りの日常というものも体験を通して知ることができましたが、その他に体が不自由な人のことはあまり知らなかったからです。調べてみると色覚異常にも幾つか種類があることや、私たちとの色の感じ方・見え方の違い、日常生活で苦労することなどを知ることができました。このような人の見ている景色がわかる眼鏡があることや、色覚異常の人のことを考えてデザインされた地図などがあることも知りました。

これらの体験を通して、「デサインする」ということは奥深いことだと思いました。今まではデザイナーというものはなんだかかっこいいものを作っている人たちなんだなあと思っていましたが、今ではその考えは少し変わりました。「デザインする」ということは「誰かのためを想う」ことだと今では思っています。その「誰か」が消費者だったり外国人であったり、体の不自由な人、若者、お年寄り、男性、女性だったりと様々ですが、「誰か」を想って作られたものが世の中には沢山あります。そうしてデザインされた物のなかで私たちは日々を快適に過ごしているのです。私もそんな物を作ってみたいと思いました。世の中に沢山デザインされたものがあるといっても、まだまだ日常生活で不便だと思うことがあります。そんな不便を、色んな人の立場に立ってデザインできる人になりたいなと私は思いました。

将来の夢

東京都立農産高等学校　園芸デザイン科　三年

鈴木博也

私は将来、野菜の生産者として農業をしたいと考えています。なぜ野菜の生産者になりたいかというと、農産高校で三年間学んで、野菜作りの楽しさ、大変さ、大切さなど多くのことを得たからです。それは野菜作りの知識や技術はもちろんのこと、暑い日も寒い日も実習をすることで体力や忍耐力も身に付きました。そして手間ひまかけて栽培した野菜を収穫したときの気持ちは、とても嬉しいものです。なによより

も、食べもののありがたみを感じることができます。これまでキュウリ、ダイコン、トマト、サトイモ、キャベツなど多くの野菜を栽培してきましたが、自分が汗水流して育てた野菜は、格別においしかったです。スーパーや八百屋にある野菜も、農家の人たちが一生懸命育てた野菜だと思うと、食べ残しをしては農家の人たちに申し訳ないと思うようになりました。自分が生産者になっても、消費者の気持ちや期待に応えられる野菜を出荷できるよう、日々努力して、技術の向上に取り組み、思いが伝わる野菜を生産していきたいと考えています。

私は夢の実現のため、大学への進学を考えています。農産高校で学んだ知識や技術は私にとってとても大切なもので、卒業までにできるだけ多くのことを身につけておきたいと考えています。その上で、大学でより発展的なことを学び、安全で品質の高い農作物を、効率よく生産するための手法を研究したいからです。日本の食料自給率は４０％と先進国の中で最低水準です。生産者として、食料自給率の向上にも取り組みたいと考えています。

もうひとつ、私が取り組みたいことは、地産地消を中心とする、「顔が見え、話ができる」関係づくりと、米を中心とし、野菜、豆、魚などを食べる日本の伝統的な食生活の継承です。農産高校では食育に取り組み、野菜の販売や、地域の人や小学生との交流を何度もしました。私たちにとって当たり前におこなっている植物の栽培管理も、交流の人たちには珍しいようで、とても喜んでくれました。私は将来、ぜひ直売や収穫体験などの機会を積極的に取り入れ、消費者と交流し、自分が作った野菜のファンになってもらえるような実力を持った生産者を目指したいと思っています。また、元気に健康に過ごせるように、自分自身も食生活に気を付けるとともに、地域の食文化について学んだり、地域の野菜を生産したりするなどして、伝統的な食文化の継承にも取り組んでいきたいと考えています。そのためには、地理や歴史、生物や化学などさまざまな分野に対する知識も必要です。また多様な年代、性別、業種の人たちと接することから、コミュニケーション力も身につけないといけないと思っています。

今の私にできることはまだまだとても少ないですが、残りの高校生活、そして進学後の大学での学校生活の中で、知識と技術を習得するとともに、多くの人と接して自分自身の人間性も磨き、私がなりたい農業生産者になるために、努力を重ねていきます。

父の姿から学ぶ

東京都立農産高等学校　食品科　二年
吉川大輝

将来の夢。この言葉を聞くと僕はみんなとは違った特別な感情を抱きます。

僕は将来、家業の洋菓子店を継いでパティシエになりたいと思っています。小学一年生の頃から父がタルトの生地をのばしたり、スポンジの生地を作ったりする作業を見てきました。年齢を重ねるにつれて、僕の中でこの仕事やってみたいという気持ちもでてくるようになりました。この時のこの気持ちがどれほど軽い気持ちだったかは後から身をもって知らされました。中学一年生になってからは父と仕事場で一対一で教えてもらうようになりました。最初に考えていたメレンゲをたてたり、生地を作ったり、製品の製造には一切手をつけられませんでした。洗い物や計量など下働きしかやらせてもらえませんでした。下働きだけで不満を持つこともあって、父は自分をいじめているんじゃないかと思う日もありました。でも、この下働きがとても大事で重要なことだとやっていくうちにどんどんと思っていくようになりました。

半年程やって初めて製品の作り方を教えてもらいました。教えてもらうレシピは自分専用のレシピ帳にしっかりと書き込んで作り方、配合などわかりやすくていねいに書くようにしました。これは今でも続けていることです。今ではそのレシピ帳の3分の2程度うまるぐらい書きました。なのでタルトやムース、プリンなどの製品は作ることもできて、よく仕込みをしています。

父に一度聞いたことがありました。

「どうして最初の頃は洗い物とかの下働きをたくさんやるの。」

と。すると父は、

「下働きは一番大事な仕事だ。下働きができないとなにもできないし、おまえが社長になった時に部下が下働きをやっている気持ちがわかるだろう。」

と言っていました。これを聞いてとても自分の心で納得しました。どんなことにも意味があるっていうことに気付かされました。

それからはどんなことにも意味はあると心にいいきかせてがまんしてがんばってきました。初めの頃に思っていたこの仕事をやってみたいという気持ちのままでは、今ごろ仕事に耐えられずにやめていたかもしれません。それぐらいに厳しい世界なのです。とはいっても楽しいから続けていられるんです。自分の中で一番元気がでるのは、自分が作って店頭に並べたケーキをおいしそうと言って買ってくれるお客様の声です。笑顔で買っていってもらうととても幸せな気持ちになります。とくに、初めて作って店頭にだしたケーキを買ってもらった時は、とてもうれしくてなんだこの感じと思うくらいでした。

この洋菓子屋という職業を手伝っていると、いろんな気持ちを味わうことができます。こんな気持ちにもなります。

僕が仕事に慣れてきた頃です。ミスをしてしまい父に普段

と同じ態度でごめんと謝ると
「ここの職場ではおまえは部下で、おれはおまえの師匠だ。その関係を忘れるんじゃない。」
と、ひどく怒られました。怒られたことよりも、この言葉にびっくりして何も言えませんでした。師弟の関係は守らなければいけないなと思わされました。
　このように、かぞえられないほど父に怒られて、いろんなレシピを父に教えてもらい、季節の商品やブームのものを父と話し合って考えたりと、思い返せば父にすごく教えてもらい育てられていると思います。今はものすごく苦労を父にかけてしまっていることを知っています。自分の心の中でも、悪いと思っています。なのでがんばって一日でもはやく父の持っている技術をすべて教えてもらって、その苦労を取り除いてあげたいです。そして妹と弟にはこの技術を僕が受け継がなければいけないと思っています。この気持ちが他の人達とは違った特別な感情です。もっとがんばって、ケーキについて勉強して、父を超えられるような洋菓子屋になりたいです。

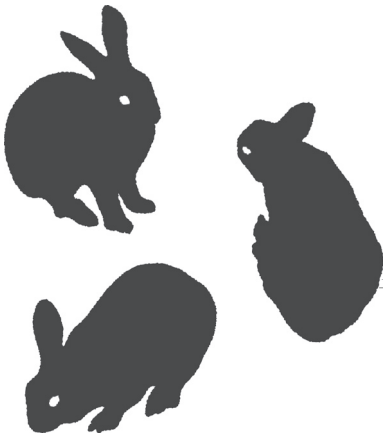
ヒトは動物の身を育て、動物はヒトの心を育てる

東京都立瑞穂農芸高等学校　畜産科学科　二年
迎　沙梨葵

　物心がついた時から、私は動物が好きだった。それは、幼い子供がおままごとをしていて、お母さん役をやった時の快感に似ているだろうか。きっとそれは、悪く言えば優越感。動物が好きという子供は、それに似た感情を持っているのだと思う。自分が世話をしなくては、消えてしまう命。圧倒的な力の差。だからこそ、可愛いと思うのだし、大切にしようと思うのだ。そうしてずっと、私は動物が好きだった。だから高校受験も迷いもなく、動物を専門的に学べて、都内で唯一の畜産科がある瑞穂農芸高等学校に進学したのだ。入学から早一年半。畜産を勉強していく中で、私が強く興味を持てるものが見つかった。それは、年に十回弱の校外活動で、「移動動物園」というものだった。内容は至ってシンプル。各地域のお祭りなどに学校で飼育している、主に小動物を連れ出し、子供を中心とした人々に動物と触れ合って頂くという活動だ。私はこれまでに、五回以上の移動動物園に参加しているが、その度、動物を介して気づかされるものがある。前文の通り、動物は人間が一方的に育てる生き物だと思っていた。だが、それは間違いであった。人、特に子供に動物は目に見

えぬものを教えてくれていたのだ。

ウサギを抱いていた子供は、不意に立ってしまった。しゃがんでと声をかけようと近づいた時、ウサギが浮遊感からか飛び降りてしまった。とても高い位置からの落下。幸運にもウサギの足に異常はなかったが、一歩間違えたらウサギにとって致命的である骨折の大ケガ。しかし、高い位置から飛びおりたウサギの姿が滑稽だったのか子供は笑っていた。だから私は、「ウサギさんは座って抱いてね。高いとウサギさんも怖いし、飛び降りたら足にケガをしてしまうから」と注意をした。そうすると子供は、面白くなさそうに「だって急に飛び降りたし、怖いって言ってくれないもん」と言った。私はこの時、「その通りだ」と妙に納得をしてしまった。ウサギは自分の危険を考えず飛び降りてしまうし、怖いと意思表示もできない。言葉を無くしていると、子供は不意に「でも、怖かったのかな…」と呟いた。その時、私は咄嗟にその子供を見た。そして、この子は今、相手の気持ちを考えているのだ！と密かに感動を覚えた。「相手の気持ちを考える」というのは、小さいころ、耳が痛くなる程、親や先生に聞かされた言葉。相手、というのはヒトだけじゃない。動物は、こんなにも自然に、何の言葉もなく、相手の気持ちを考えることを教えてくれているのだと気付いた。脳が発達し過ぎている人間の子供からしたら、動物の行動は不可解なものばっかりだ。でも、その行動には意味があって、何故こうなるのだろうかと人間は考えざるを得ない。この時の場合、子供は「ウサギが勝手に飛び降りた。何故だろう。高い位置が怖かったのだ」と気づけたのだ。これこそ、相手の気持ちを考える、ではないだろうか。



今回はもう一つ。その子供は、モルモットに腕を噛まれてしまった。どうやら、モルモットの毛をヒトの髪のように手櫛を通していたらしく、それがモルモットには痛かったのか、噛むと言う防衛を働いた様だ。軽く歯で挟む程度だったから、子供も痛みで泣くことはなかった。ただ、噛まれたらそれは当然不快であり、不服そうに怒鳴った。「何で綺麗にしてあげていたのに、噛むのぉ！」と。うまく宥めようと言葉を探していると、隣にいた妹がその姉に「嫌だったんじゃないのかなぁ？」と言った。あ！まただ！と私は思った。この子は今、自分が正しいと思った行動が、相手にはそう受け取れなかったのだと気付いたのだ。

自分の価値観を否定されるというのは、幾つになっても面白くない。だが、自分の価値判断があれば、子供は、なんでだろう？と考えるだろう。そうして気づく筈だ。自分の一方的な愛情の押しつけだったのだと。このように、言葉がない動物と、通じ合うには、考えて、葛藤して、認めなければいけないのだ。なんて動物は凄いのだ！と私は思う。この高校に通い、この活動を通し、私は、「動物福祉」を何回も感じた。動物は、ヒトに目に見えない物を与えているのだ。私はこれからも、もっとヒトと動物の通じ合う瞬間を目の前で感じて

みたい。移動動物園は、卒業まで続けていきたいし、将来的にも、動物がヒトに何かを教えてくれるきっかけを、作っていけたらと思う。こんなにも、私に動物の可能性を感じさせてくれた移動動物園には感謝しきれない。移動動物園はずっと続けていくべき活動であると思う。この様に私が作文を書けるのも、動物が教えてくれたおかげなのだから。

調理実習で気付いたこと

東京都立農業高等学校　食物科　二年
田湯由華

私は、都立農業高校の食物科に通っています。この食物科は、都立で唯一卒業後に〝調理師免許〟がもらえる学校です。調理について学びながら普通教科の国語・数学なども勉強する学校です。私は今二年で、主に調理実習・栄養・食文化・公衆衛生・食品衛生についての授業を受けています。はじめに挙げた調理実習は週に一日、五時間続き行います。そして、二・三年生の調理実習では実際に現場で働いている調理師の方々に教えてもらいます。週替わりで中華と和食・洋食を実習していくのですが、この、調理実習こそが、この食物科の最大の魅力であり、実践力のつく凄い教科なのです。

調理実習は、入学後すぐ始まります。一番はじめの実習は包丁の扱い方、材料の切り方から学びます。そしてはじめは鍋でご飯を炊く、味噌汁を作るという実習が、親子丼、スパゲティ、ハンバーグなど、回を重ねる度にどんどん工程が増え、複雑なメニューになっていき、一年の最後には魚をおろしたり、煮物を一から作るようになります。このように実習は次々と新しい事が増え、大変になります。でも、それが自分の力となります。

私も、はじめの実習ではどう動いたらいいか全く分かりませんでした。初めて調理した時のことをよく覚えています。最初は先生のデモから始まります。しっかり見て、話も聞いているつもりでした。でも、いざ作業開始と言われると、何からしたらいいのだろうと分からなくなってしまいました。でも、私と同じように見て、話を聞いていた友達はしっかり動けていました。私はどうしてだろうと毎週不思議に思っていました。でも、ある時やっと気付きました。

調理実習では、作り方の順番・材料の切り方だけ覚えていても駄目だったのです。先生の話を聞く段階で全ての材料・作り方から自分のやることのプランを立て、どの順番でいけばスムーズにいくのか、頭の中でイメージしていく必要があったのです。

例えば、それまではたくさんある作業工程の中でAのメニューでは材料を切りBでは炒めるのをやろうと一つひとつ別にして考えていました。でも、今日の自分は、初めにこれをやり、次にあれをやり、その次はあれをやろうと、繋げて考えるようにしたら、常に今これをやって、次にあれをやるという頭のくり返しで、とてもスムーズに動くことができるし、全体を把握できることでミスも減りました。

それに気付いたことや、実際に自分で考えていくことで頭

をよく働かせながら実習をするようになったのが、私にはとても大きな成長に思います。このことが分かってからは、実習の終わる早さだけでなくテストにまで変化が起きました。

一番始めのテストは細かいところまで覚えなくてはいけないし、範囲も多いしで、テスト勉強がとても大変でした。そしてテストの点もあまりよくなかったです。

でも、そのことに気付いてからは実習で体と頭で自然と覚えているのですぐ勉強が頭に入ります。さらに、もしテスト中分からない問題があっても実習中のことを自然とよく覚えていて、思い出して答えが分かることもあります。そうすると、自然とテストの点が伸びます。実習のノートもより深く書け、それらのおかげで成績も上がります。それがやる気となり、次につながります。

そうして私は解決策を見つけ、成長しました。気付けたおかげでやる気をもって実習にのぞめてたくさんのことを吸収できます。そして内容の濃い勉強ができるようになり、楽しさも増えました。

私の実習生活はこれからも続きます。今に満足しないよう常に上を目指して、楽しさを忘れず日々たくさんのことを実習から学んでいきたいと思います。

一つの野菜から学んだ多くのモノ

東京都立農業高等学校　食品科学科　二年
西久保恭平

私は、農業高校の食品科学科という所にいる。一年生だった私が受けていた専門教科を簡単に説明すると、畑で野菜を育てたりする環境系と食品を製造する製造系など数種類に分けられる。

製造系は、パンを焼いたりジャムを作ったりなど、もともと料理を作るのが好きな私にとってとても楽しい実習だった。

しかし、畑での作業が中心の環境系は正直・・・地味だ。と、まだ一年生だった当時の私は感じたのだ。

なぜなら、やる事の大部分は草むしりなどだからである。雑草を取り除く事は、作物のための栄養分が雑草に奪われて十分に育たない作物が出来てしまうのを防ぐための作業なのでとても大切なのだが、いざ作業に入ると、何の面白みもなくただ同じ事をひたすら繰り返す・・・。「こんな事よりパンとかを作る方がどれだけ楽しいか。」と何度考えたことか。

しかし、ある一つの野菜の栽培と先生の一言によって私の中で何かが変わった。

あれは確か一学期の後半、日に日に暑くなっていくのが良くわかる頃だった。ある野菜を育てていた。トマトだ。普通

ならいつものように何も考えずに世話をするのだが、今回は違った。その理由は先生の一言にあった。

「このトマトはただ収穫するだけじゃなくてケチャップに加工するんだ。」と・・・。

私の中で何かが変わった。一からモノを作る。こんなの初めての経験だ。早く作ってみたい。ならばまず自分は何をすれば良いんだ?そうだ、しっかりトマトの面倒を見てあげよう。もう「除草などの大切な事は地味や面倒だ。」などの考えはやめだ。どうせ作るなら良いモノを作りたい。何事も出だしが肝心だからな。

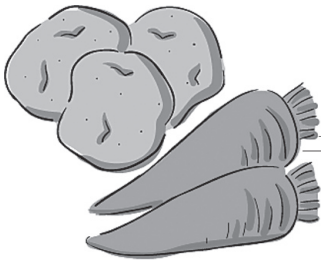
そんな言葉たちが、私の頭の中を電流のように駆け巡っていった・・・。

この日、私自身がまた一歩成長することができたように感じた。

考えが変わるとモノに対する見方も変わるようだ。日がたつにつれて成長するトマトを見ていると嬉しく思えてくるのだ。そして、真っ赤になったトマトを収穫し、その中の一つを手に取って眺めていた私の顔はいつの間にか笑顔になっていたのだ。無意識のうちだったので自分でも理由がわからない。もしかすると、それは多分、「うれしいから」だと思う。

収穫したトマトはどれもキレイな形とは言えないけれど、今まで見てきたトマトの中で一番美しく見えた。

そして、いよいよケチャップを製造する日がやってきた。ケチャップの作り方は、洗ったトマトを裏ごしして、鍋に入れて加熱濃縮をして、ある程度煮つめる。これでトマトピューレの完成だ。これに、調味料や香辛料を加えてさらに煮つめ濃縮するとトマトケチャップの完成だ。あとはケチャップをビンに詰めて殺菌・脱気処理をして製品となる。



完成したケチャップを早く食べたい、と思いながらもらったビンをカバンに入れ、私は足早に学校を後にした。帰りの電車の中では、ケチャップを何につけて食べようか、と考えてばかりだった。

結局、シンプルにソーセージに決めた。その日の食卓の中心にはケチャップとソーセージが並べられた。ソーセージはボイルされたばかりで、湯気をもうもうと立ち上らせている。口の中で生唾があふれているのがわかった。ちなみにマスタードは使わない。ケチャップに申し訳ない気がしたからだ。気が付くと家族が食卓に揃っていた。

「いただきます。」・・・私は早速ケチャップを付けたソーセージを口に運んだ。一番最初に感じる味はケチャップだった。その次にパリッと弾けたソーセージの皮からあふれる肉汁の味、至福の一時とはこの時を言うのだろうか。それに、ケチャップも市販の物とは違いケチャップと言うよりはピザソースと言えるくらい幾重にも重なった深い味わいでとてもおいしい。だが、もっと感じたのは、味などではなく、一つの生き物の始まりから終わりまでを全て見届けるという大変貴重な体験をした喜びだった。

今まで私はトマトが苦手だった。だが、この体験をした後

では、好き嫌いがほとんど無くなった。そして、同じ地に立っている者として、彼らに感謝し彼らの分まで生きなければならないと思った。

私はこの栽培から始まり加工をし食べるまでの中で、改めて食べ物の大切さやありがたさ、命の尊さを学ぶことができたのだ。

もし、皆さんも家庭菜園などで、一から育てる事があれば、その時は愛情をいっぱいかけて育ててもらいたい。

必ず、良いモノが出来るだろう。

ものづくりを通して学んだこと

東京都立中野工業高等学校(定)　総合技術科　四年

滝口貴大

私は、中野工業高等学校定時制の機械類型で、様々なことを学んできた。一年生から二年生の頃は、旋盤、フライス盤、溶接、鋳造など、基本的な知識や技術を学んだ。また、様々な機械工具の使い方やその名称、図面の読み方や書き方の基礎なども学んできた。

そして、三年生に上がる頃には機械の扱い方にも慣れてきて、特に、旋盤とフライス盤は授業で最も習ってきたおかげで、自分でも技術の上達が感じられた。この年は四年生で行う「課題研究発表会」に備えて、その練習として「実習成果発表会」が行われた。

実習成果発表会とは、生徒一人ひとりがプレゼンテーションソフトを使って、作品や研究内容を発表する会である。自分で決めた課題を一年間かけて製作・研究し、それを発表する課題研究発表会とは違い、三年生後期の半年間に及ぶ実習の成果を発表するのである。機械類型の生徒には、オリジナルフォトスタンド製作という統一テーマが、与えられた。

この時、私は主にフライス盤とアルミニウムの角柱を使って、立方体にピラミッド型の屋根をつけたフォトスタンドを製作した。四つの側面全てに写真を差し込めるものだ。作品が完成して実習成果発表会が無事に終わったときには、安堵感とともに強い達成感を得ることができた。終わってみればなんてことはなかったが、作っている時はとても苦労した。

それまでは、生徒全員が先生方から与えられる課題をただこなすだけだったが、これは、どんなデザインにするか、自分の技術レベルでそれを作るためには、どのような方法があるか、また、期日内に完成させるためには、何日までに何を済ませておく必要があるか等の予定も、自分で考えなければならなかった。私はデザインがなかなか決まらず、決まったら決まったで、次は、思い通りの形にするには何をどうしたらよいのかと、製作中はとても頭を悩ませた。そのうえ、材料を駄目にしてしまい、作業をやり直す羽目になった。そうでなくても、私の作品は、もともと部品の数や作業の手間が多いものだったのに、そんなことがあったので、期限までに完成できるかどうか危うくなった。

しかし、連日、放課後も積極的に製作に専念し続けることで、何とか発表日までに、作品とプレゼンテーション用の原

稿を完成させることができた。この経験で、私は、自分で考えて作るものづくりの難しさと自らの手でものを作っていく楽しさを知ることができた。そして、機械類型が好きになっていったのもこの頃からだった。

私は入学当時、機械類型を選択しようとは思っていなかった。かといって、食品類型を選択する気もなかった。別にどちらでもよいという、無気力で無関心な生徒だった。だから、機械類型を選択したのも友人からの誘いがきっかけだった。実習の授業では機械の扱いはあまり得意ではないし、先生方から与えられた課題をこなしていくことにも楽しさを感じることができず、どうしても機械類型が好きにはなれなかった。

しかし、今は違う。約三年半にわたり機械類型で学び、実習成果発表会でものづくりの難しさと楽しさを知ることで、機械類型を好きになることができた。今は四年生になり、課題研究発表会に向けて新たな作品製作に励んでいる。この学校のこの機械類型に出会うことができて、心からよかったと思っている。ただし、そう思うのは、「楽しい」ということ以外にも理由があるからだ。

私は、現在、芸術系大学への進学を希望しており、将来は映像メディアやデザイン関係の仕事をしたいと思っている。そして、いつか、自分の手で世の中に新たなエンタテイメントを送り出したいという夢を持っている。そんな私にとって、機械類型のものづくりを通して得た経験は、本当に貴重なものだった。何か難しいことや大変なことがあったとしても、すぐに投げだすことなく、問題一つ一つと向き合い、それを乗り越えて、その先へ進む。私は、フォトスタンドの製作を通して、この精神を学んだ。

芸術と機械、舞台は違えど、私が中野工業高校定時制の機械類型で学んだことを、大学でも社会に出てからも、生かしていきたいと思っている。

学校生活で学んだこと

東京都立中野工業高等学校(定)　総合技術科　四年

稲江紀子

私は、以前、北豊島工業高校に通っていました。ところが、そこは機械科しかなく、入学してから私には向いていないとわかり、退学して二年間は食品関係の仕事をしていました。

家が食品を扱う仕事をしていた関係で、廃棄する野菜をもらい、それを刻んで遊んでいるような子供だったので、幼い頃から自然と、食品に興味を持つようになっていました。また、仕事先の人や親の勧めもあり、もう一度高校へ通ってみようと考えて、本校に入学しました。それは、食品工業類型があったからです。

そして四年目の今、私は、就職活動の真っ只中です。食品加工の仕事がしたいので、入社試験に備えて勉強しています。

面接の練習もしますが、仕事をするのに大切なことは何か聞かれたら、負った責任の重さに差はあるかもしれないけれど、チームワークや協調性がとても大事だと答えたいと思っています。入学した頃は、思いもしなかったことですが、今

はよくわかります。私は、学校の実習とクラブ活動でそれを学びました。

食品工業の授業では、微生物学や栄養学、食品学も勉強しました。どれも大切なものでしたが、その中で、一番真剣に取り組んだのは実習です。

実習の先生は、「実習はチームワークだ」といつも言います。ひとつの物をみんなで作り上げるので、チームワークと協調性が重要になります。一人だけが頑張っていても、いいものはできません。自分に与えられた作業をきちんとこなすことはもちろんだけれど、それが終わったら、周りを良く見て、大変そうなところに自ら声をかけて、手伝います。そして、洗い物はすぐ片付けます。

二年生でカップケーキ、三年生でジャムやジュース、四年生で鯖の味噌煮の缶詰、カレーライスのレトルトパックなどを作りますが、これらは文化祭やボランティアで売ることもあり、食中毒など気をつけなければいけないことがたくさんあります。まず、食品の実習で一番大切なのは洗うことです。洗いから始まり洗いで終わる。当たり前のことだけれど、とても大切なことです。それをしっかりと頭に入れて実習を行っています。

全員の作業が完了してはじめて、実習は終了します。周りも自分もやりやすい「環境」を作ることが大切だと思いました。

そして、クラブ活動です。私は学校生活で「青春」というものに憧れていました。青春といえばスポーツというイメージがあったので、部活をやりたいと思っていました。

一年生の夏に球技大会があり、そのとき、四年生の中にバドミントンがとても上手い人がいて、私は直感でバドミントン部に入りたいと思い、入部しました。

すぐに秋の大会があったのですが、ルールも分からない状態だったので、出場しませんでした。その時、部長に「試合には出られないけど、試合に出ているつもりで、他の学校に負けないくらいの声で応援してね」と言われましたが、そんな声を出したって意味がないと思いました。当日、恥ずかしくてあまり応援ができませんでした。そして、先輩達は一回戦で負けてしまいました。

その一ヶ月後にも大会があるので、今度はしっかり応援しようと思い、先輩に言われた通り、周りに負けないくらいの声で先輩達の応援をしました。先輩達は試合中に笑顔で振り向いてくれました。私は、今までに味わったことのない気持ちになり、ずっと大きな声で応援を続けました。緊張がほぐれたのか、先輩達はいつもの調子を取り戻して、見事、勝つことができました。私は、そこで初めてチームワークということを学びました。

バドミントンは、野球やサッカーに比べ、部員全員のチームワークなんて必要ないと思っていました。でも、一人だけの力では、スポーツはできないと感じました。

先輩達が大勢卒業してしまったので、今は四人しかいませんが、先輩達に教わったことを後輩に伝えていきたいと思っ

て、部長を去年からやっています。

これは、仕事でも一緒だと思います。高校生活の「青春」で学んだことを、これからも活かしていきたいと思っています。

「私の将来の夢」

東京都立江東商業高等学校　総合ビジネス科　一年

横山　夏澄

私の将来の夢は看護師になることです。きっかけは私が小学生の時にまだ幼かった妹が入院した事でした。幼い妹に付きそって母も毎日病院に泊り、私も毎日病院に通っていました。そんな時、慣れない病院生活に泣きだしてしまっている妹に、優しく声をかけ、笑顔で話をかけていた看護師さんに憧れるようになりました。そして、その看護師さんは、小さい子だけではなく、どんな人にも同じように接し、私にはできないような事も、笑顔でこなしていました。そんな姿を見ていつしか憧れから「自分の夢」へと変わりました。

それからというもの職業調べというものがあれば必ず看護師について調べてきました。たくさん調べたおかげでわかったことがあります。それは並たいていの努力では、看護師にはなれないということでした。看護師になるためには国家試験に受からなければなりません。一回の受験で合格するということは、とても困難で、たくさんの方が、何度も受験しているということです。しかし、その話を聞いても私の夢が変わることはありませんでした。むしろ、「私はこの試験に一度で合格するようにたくさん勉強しよう」と強く思いました。さらに、私が目指す看護師は普通の看護師ではありません。この江東商業に入学することができたのですから、たくさんの資格を持ち何にでも対応のでき、信頼される看護師になりたいと考えています。

それは、現在の医療現場で発展している電子カルテなど、パソコンを使いこなせる看護師になることです。

また、私が江東商業に入学したいと強く思った理由は、簿記の授業が受けたかったからです。看護師になりたいのに「なぜ簿記？」とよく聞かれます。確かに簿記と看護師に何の共通点もありません。しかし、共通点がないからこそ協力をし、資格取得につなげ、国家試験を一回で合格できる精神力を身につけたいと思っています。今では、私は学校の授業の中で簿記が一番好きです。

また、私が目指す看護師は、今後、商業・簿記・パソコンの資格がかかわってくると思っています。だからこそ、たくさん勉強しなければならないと感じています。そして、その努力をしていこうと思います。

最近では、看護師になるためのステップとして、ボランティア活動に参加したり、もっと身近なところで自分のできることを見つけて、少しでも人の役に立つことができたらと感じています。

しかし、夢を実現するためにはもちろん自分自身での努力が一番ですが、時には周りの方々に頼ってしまうことも、た

くさんあります。今までも、両親や友人などたくさんの方々に助けてもらってきました。高校入試の時も、両親にはたくさんの相談にのってもらい、友人には面接の練習からアドバイスをもらいました。今は、商業知識のある看護師を目指しているため、大学進学を考えています。これから、周りの方々には、たくさんの迷惑をかけますが、いつか夢がかなった時には、必ず感謝を伝えたいです。

私の幼い頃からの夢を実現するためには、この高校生活を楽しく過ごすと共に、行事にも積極的に参加をし、何事にも努力を惜しまず、たくさんのことにチャレンジしていきたいと思います。

そして、十年後でも二十年後でも、何年かかっても信頼される看護師になりたいと思っています。

マーケティング実践

東京都立江東商業高等学校　総合ビジネス科　一年

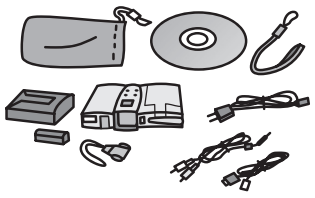
海老真由香

中学生の頃、私はまったく勉強しませんでした。その頃は、初めて自分に後輩ができ、部活動以前に勉強ぐらい出来るようにならなければと、考えていました。しかし、現実は今まで遊んできた私を見逃すほど甘くはありませんでした。一年生の時にきちんとやっていれば出来るような簡単な問題などでも、悪い点数しかとったことがなく、担任の先生や親を高校に行けるのかと不安にさせてしまいました。

中学三年生のとき親に塾に行くように勧められ、私は塾に通うことにしました。しかし、親の期待に応えることはできず、成績は悪くなる一方でした。受験に反映する二学期の中間考査もひどい結果になってしまい、私はそのとき初めて、なぜ今まで差し伸べてくれた手を、見ないふりをしてきたんだろうと心からそう思いました。

そして、そのまま高校入試をうけることになりましたが、奇跡的に高校は受かっており、わけのわからないまま入学してしまいました。

そんな江東商業高校に入学してから、遊んでいる暇もなく授業が始まり、そのなかには中学校では学んだことも聞いたこともない簿記、情報処理、そしてビジネス基礎がありました。その中でも、ビジネス基礎の授業は先生と生徒が一丸となって授業を進めていくスタイルで、生徒が発言をしないと授業が進まないので勉強が嫌いな私でも、自然と授業の内容が頭に入ってきました。今まで勉強が楽しいなんて事は一度もなかったのに、ビジネス基礎は学んでいて本当に楽しいと思えました。



そんな時、学校の部活動にマーケティング部という部活動があることを耳にし、私は興味があったので、自分のためになるとも考え、マーケティング部に入ることにしました。マーケティング部に実際に入部してみると、経済について何も知らないのだと改めて実感したのです。その中で私は様々なことを学びました。

例えば、モノが売れるためには良い商品が必ずしも売れるわけではなく、市場調査やその商品の価格、それをどのような形で売っていくかなど、様々な戦略があってこそ、売れる商品が生まれるのだと部活動を通して知ることができました。モノを売ることは簡単に見えて、実はとても難しいことであると改めて実感しました。

そして、部活動で得た知識を実践するときがきました。学校近くの町内会のお祭りに出店をすることになり、それにむけて部員とともに計画を練っていくことになりました。まず私たちが取り組んだのは、何を売るかということでした。どのようなものが皆に欲しがられているのかを市場調査をし、校内で約百名の生徒にアンケートを実施し、集計してまとめていきました。結果、私たちは校内の生徒をターゲットとし、冷めてもおいしく味のバリエーションが豊富なラスクに決定しました。

計画は次の段階に進みました。ラスクの共同開発者を探し、試作を繰り返します。特に、面白いと感じたのは、価格の決定方法です。はじめは、コストプラス法という、原価に利益を加える方法で価格を決定しようとしました。しかし、それだけでは、販売がうまくいきません。それは、同じラスクで販売価格が違うと、値段の高いラスクが、売れなくなってしまうからです。そこで、私たちは均一価格政策という、ワンプライスショップの方法を採用しました。すべての販売価格を同じにするのです。

このように、様々な経験をしてきた私たちに、とうとう販売の日が近づいてきました。前日には、約五百個のラスクを仕入れ、一つずつ小分けし包装しました。お祭りの当日には、二日間で約五百個、一日あたり、二百五十個ほどを売り切ります。初日は、お客様に商品の存在を知ってもらうことを第一に、大きな声をかけました。その結果、多くの方が来店してくださり、四十五分間で完売しました。

二日目は、商品をいくつかかごに入れ公園内を歩き回り、お客様に一対一でＰＲすることにより、購買意欲を刺激するというプッシュ作戦の効果があってか、初日よりはやく完売することができました。商品がおいしいことはとても大切ですが、商品を知ってもらうために声かけをし、販売促進活動に力をいれることが今回の成功につながったのではないか、と考えています。

私は入学当初、なぜこの高校に入ってしまったのかと毎日そんなことを考えていました。しかし、商業高校に入学した事で、中学生の頃は考えようともしなかった、「経済をより身近に感じる」ことができました。

そして、商業高校に入学したことで普通科高校にはない、マーケティング部に入部することができたのです。マーケティング部に入部したことで、様々な経験を積み、商品を売るということがいかに難しく、また楽しいことなのだと実践

を通して感じることができました。

最後になりますが、今回のお祭りを通して得た経験を、これからの学校生活に活かし、マーケティング部に今後入部してくる後輩たちにも、今回私が得た経験を伝えていきたいと思います。

そして、今現在、私のあることが変化しています。それは、初め就職を希望していたのですが、今は大学進学を考えていることです。今後は、商業の高度な知識を学び、起業を目指して、私の〝マーケティング実践〟を継続していきます。

商業高校に入学して

東京都立江東商業高等学校　総合ビジネス科　一年

中村帆七海

「帆七海、これじゃちょっと危ないぞ」

これは、中学校三年生の三者面談の時のことです。高校入試を控えた私にとって、先生からのきつい一言は何度も頭の中を駆け巡りました。先生は、この成績で第一志望の入試頑張れ、と背中を押すのは、かなりの抵抗がある」とのことでした。原因はただ単に、私の勉強不足です。

そして、その日の三者面談では、志望校を変更する、という先生の提案が結論になり、とても受け入れがたかったです。そこで私は、第二志望校にしていた江東商業高等学校へと進学を決意し、焦って勉強を開始しました。

学校説明会に行き、まず感じたことは、江東商業生の皆さんは、身だしなみがしっかりできていて、来客した人に接する態度など、私の知っている高校のイメージとは、まったく違っていました。

入学後、はじめはわからないことだらけでした。そして、そんな私に追い打ちをかけるように、商業科目の授業が始まり、簿記、情報処理、ビジネス基礎、と初めてきく名前ばかりです。予想していた通りゼロから始まる授業は毎日が新鮮でしたが予習・復習がなければ、すぐにわからなくなってしまう雰囲気でした。

とくに、簿記はだんだんと授業の密度が濃くなりはじめ、ほんの少しの時間も惜しいくらいでした。授業後は先生に質問攻めで、それは授業の度に続きました。情報処理では、基本であるタイピングから始まりました。「なんだ、簡単だな」と感じたのもつかの間、あっという間に授業は専門的な内容になり、わからなくなってしまいます。しかし、唯一、商業科目のなかで楽しく参加できる授業は、ビジネス基礎でした。この授業は、積極的に生徒が発言していかないと、授業内容が進まないスタイルで、常に先生と生徒が対話しているような授業でした。担当する先生もユーモア溢れる方で、とても面白かったです。

私は、その先生が顧問である、マーケティング部という部活に興味を持ち、入部してみることにしました。商業高校ならではの部活ということもあり、卒業後は就職を希望していた私にとって、自分の将来の糧になるのではないかと思ったからです。

マーケティング部での活動は、一言では言えないほど、そのひとつひとつが、どれも貴重な体験で、この部活に入部していなければできない、どれも他人に自慢できるような活動ばかりでした。

その中の一つに、江東区の特産品を開発する、というものがありました。学校内で市場調査としての校内アンケートを実施し、何を商品開発するか、というところからスタートしました。ターゲットは女子高生とし、テーマは「小腹が空いた時、何を食べたいか」ということです。アンケートの結果からは、パンの意見が多く、このことから味のレパートリーが豊富なラスクに決定しました。次に商品開発をするにあたって、近隣のパン屋さんにご協力を頂き、試作してみることにしました。種類はアンケートの結果から、エクレア風ラスク、メロンパン風ラスク、ゴマラスク、きなこラスクに決定しました。何回か試行錯誤を繰り返した結果、思い描いたようなラスクを開発することができました。ネーミングは江東から文字って「ＫＯＴＯちゃんラスク」とし、ついに販売実践活動へと移りました。

まず八月に行われる二日間の納涼祭りで、ラスクを販売することを目標としました。そのために、パン屋さんでのインターンシップ体験から、パッケージデザインの検討、ラッピング方法など、様々な経験をすることができました。しかし、最後には無事終えることができ、本当に貴重な体験をすることができました。最終的に、パン屋さんには計四百八十個のラスクを発注し、仕入をするなど本当の商業体験をしました。納涼祭りが近付くにつれ、私たちは更なる下準備を開始しました。おつり用の小銭作りや、商品の検収をしたりと、とても忙しかったです。

そして完売を目標として、ついに納涼祭りの当日を迎えました。初めての販売実戦はとても緊張して、声が出せなかったりと、問題点や反省点がたくさん見つかりましたが、その日はなんとか目標販売個数に達することができ、とても嬉しかったです。二日目では、昨日の反省点を生かし、なんなく完売することができました。完売時には、地域の方々が一緒に喜んでくれたり、一緒に盆踊りを楽しんだりと、とても楽しい一時を過ごすことが出来ました。

その結果、開発から販売するまでの過程を商業研究発表会で発表したところ、優良賞として、東京都の商業高校で二位という実績を残すことができ、とても嬉しかったです。それと同時に、部活内の先輩方や部員との親睦を深めることができ、この活動を通して得たものは、優良賞だけではなく、部内の絆もより一層深まったと思います。このようなことから、マーケティング部に入部して、本当によかったと感じました。

私は、今ではもう、毎日登校することが楽しみなくらい高校生活が充実しています。毎日新しいことばかりで、一つ一つが新鮮で、とても楽しいです。

今考えると、普通科の高校に入学していたら、「こんな素晴らしい体験はできなかったのではないか」と、感じています。

最後に、私は卒業後、就職を希望していましたが、もっと商業について学びたいと思い、進学も視野にいれ幅広く考えていこうかと思っています。さらに、私は胸を張っていえる

ことがひとつあります。
それは、江東商業高校に入学して良かった、ということです。

念願の全国大会出場

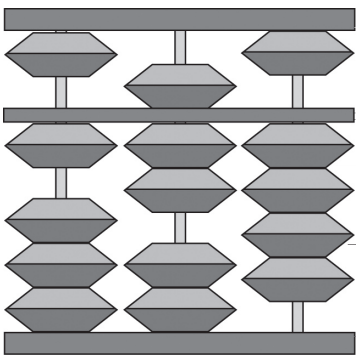
東京都立第五商業高等学校　商業科　一年
佐竹美鈴

二年前の夏、私が中学二年生の時、母から高校珠算部の全国大会が都内であるから見に行ってみるかと聞かれ、私は迷わず「行く」と返事をした。
会場の荒川商業高校では、各学校から集まった選手たちが鉢巻姿やお揃いのTシャツを着てそろばんをはじいていた。珠算競技の一つである読み上げ暗算では、私も一緒になって頭の中で計算して、答えを出したりした。私はその時吹奏楽部に入っていたけれど、会場に足を運び、大会の雰囲気を肌で感じたことによって、小学校一年生から続けている珠算を高校でも続けたいと思い始めた。そして、全国大会にも出場したいと強く思った。その後、中学三年生になっても私の思いは変わらず、受験勉強をしながら週五日珠算塾にも通い、出場する大会も今までより増やして経験を積んだ。
二〇一〇年四月、私は志望していた都立第五商業高校へ珠算の推薦枠で入学した。迷わず珠算部へ入部し、今までやってきた珠算種目には無い「応用計算」の練習が始まった。初めは、問題文を読んでも意味が通じない言葉ばかりが出て来て、全く何をしたら良いのかわからず、顧問の先生や先輩に一つひとつ教えてもらいながら解いた。しかしそれでも、一つ覚えて次の問題が解けるようになったと思うと、前の問題の解き方が思い出せなくなり、思うようにはかどらなかった。更に、これまでずっと練習を続けていた四則計算でも点が伸び悩んでしまった。だが、四則計算に対しては、今まで積み重ねてきた練習量から何とか挽回していけるだろうと思い直し、応用計算の解き方をまた一から覚えなおすことに集中した。
六月の予選大会当日、母から「今日は場慣れの日と思って、雰囲気に慣れるだけでいいんだよ。」と言われ、私は会場へ向かった。他校生を見回すと、知っている人が何人かいて、皆それぞれ頑張ってきたのだろうと思った。この予選大会では、八百点以上をとって団体で入賞しようと、先輩と目標を持って臨んだ。個人的には、読み上げ種目での入賞と、総合競技では自己ベストの点数を出すということを目指し、全国大会出場の切符はおまけだと思っていた。結果は、残念ながら団体での入賞は出来ず、読上算では緊張で指が震え思うようにはじけず予選落ちした。しかし、読上暗算では二等で総合競技では三等に入り、念願だった全国大会への切符を手にすることができた。長い間頑張って続けてきて本当に良かった。
それからは、全国大会に向けた練習が始まり、夏休みに入ると関東選手団の練習もあった。初めての合同練習会は、総合競技練習の繰り返しで、私にとっては今までにやったこと

のない一日五時間という長時間練習だった。慣れない私は、一回目で力を出し切ってしまい、その後は集中力が途切れて、練習を繰り返すたびに合計点が下がっていってしまった。応用計算も練習不足で他の選手とは雲泥の差で、このままでは大会当日の緊張に勝てないと思い、翌日からは毎日今までの倍の練習をした。

そして八月になり全国大会当日を迎えた。会場に入ると、二年前と同じ鉢巻姿やお揃いのTシャツ姿が目に入り、ついに私も同じ舞台に立つことができたのだと思った。だがよく見ると、他校生は少しでも時間があるとそろばんをはじいていた。それを見て私は、わずかな時間も惜しんで練習をするのが全国大会のレベルなのだと知って気持ちが引き締まった。総合競技では、真横と真後ろの席が空いていたことで緊張せずに集中してそろばんをはじくことができた。応用計算は、問題を見たら計算式がすぐに浮かんできたつもりだったが、結果的には全然練習の成果が出せていなかった。個人種目では、読上暗算と伝票算に出場し、読上暗算は決勝まで進んだものの、全国のレベルは思った通り高く、入賞にまで手が届かなかった。伝票算は、順調に予選を通過したけれど、決勝で一問間違えてしまい、上位はねらうことができなくなった。個人競技の決勝では一問ごとに答えあわせをし、正解した人だけが次の問題に進めるので、一問正解するごとに緊張感が強まって指先に伝わり、珠算以外の競技と同じように、やはり最後は自分との戦いとなる。そのような中、私は敗者復活で正答が続き、佳良に入賞することができた。まさか、初めて出場した全国大会で入賞できるとは思ってもいなかったから、とても嬉しかった。

全国大会に出場して、今まで珠算を続けてきて本当に良かったと思う。高校へ入学して、応用計算問題には苦労しているけれど、集中力と毎日の練習の積み重ねが何より大切だということを、改めて実感することができた。来年も全国大会に出場できるように、これからはまた日々の練習を大切にしたい。特に、応用計算に力を入れて総合競技で入賞することを目標に練習したいと思う。また来年は二年生になるので、一年生に教えてあげられるような先輩になりたい。珠算の技を磨くには自分の努力が欠かせないが、部員全体が力をつけていくためにも励ましあって頑張ろうと考えている。



―表 彰 式 風 景―

専修学校の部　優秀賞

人生観を変えたボランティア活動

ホスピタリティツーリズム専門学校
エアライン学科　二年
笹野愛紗

私には、日常を過ごす上で常に心に留めている考えがあります。〝やりたいと思うことにはまず挑戦する〟というものです。この考えは、短大在学中に参加した一日限りのボランティア活動から学び得ました。たった一日の短い活動でしたが、私の人生観や職業観を大きく変えるものでした。

私は高校卒業後、2年間をアメリカの短大で過ごしました。英語での会話力を伸ばしたいと思っていた私は、毎週末何かしらボランティア活動に参加するようにして、地域の方々と交流するように努めました。ビーチのごみ拾い、灯籠流しやマラソン大会などのイベントのアシスタント、スリフトショップの手伝いなどをしていました。色々なボランティアをした中でも一番心に残っているのが、日本とハワイの失語症患者の方々の交流会での通訳の仕事です。

とあるホテルの結婚式場のような会場で、丸いテーブルに日本人とアメリカ人の失語症患者の方が交互に座り、その間に私達学生通訳のボランティアが座り、意思の疎通のお手伝いをするものでした。日本とアメリカの介護制度の違いや、いつ、どのようにして失語症になったのかなど様々な会話をされるのを日本語から英語、英語から日本語へ直して伝えました。ご想像できると思いますが、学生レベルの英語力なのでうまく伝えられないこともありました。しかしみなさんとても温かく私の言葉を聞いて下さいました。

和やかに会が進行する中、ある一人のアメリカ人の失語症患者の方がステージに上がり話し始めました。その方は数年前急に倒れ、失語症になったとおっしゃっていました。

「今日、ここにいる人たちは皆ラッキーです。失語症になると、うまく話せないことを恥ずかしいと思い、家族が隠そうとしたり、本人が家に閉じこもってしまう場合も多くある。今日ここに集まった人は、自ら外に出て人と交流をしようとし、またそれを支えてくれる家族がいます。病気になったことを悔やんだり恥じるのではなく、しっかりと向き合って何にでも挑戦していきましょう。」

詰まりながらも一生懸命にお話される姿は力強く、すごいパワーを感じました。確かにその会に出席されている方々は皆さん大変生き生きとされ、お手伝いしているこちらが元気を貰う程でした。

その日ボランティアを終え、一緒に通訳に参加した友人と話しながらバスで帰りました。その子も私と同じく、言葉では伝えられないパワーを貰ったと言っていました。病気に負けずに前向きに生きている方々と接し、私も負けずに何にでも挑戦していこうと思いました。

その日以来、私は挑戦するかしないかで迷った時はまずチャレンジしてみます。チャレンジしないことには可能性は0のままです。やってみて出来なかったのなら納得も出来ま

す。人生一度きりなので、何事も納得が行くまで挑戦してみよう。そんな考えをそのボランティア活動から学びました。

ホスピタリティツーリズム専門学校に入学したのも、私にとってはチャレンジでした。高校卒業したての5歳下の子達と仲良くなれるだろうか。この年齢で希望の職に就けるだろうかと不安はたくさんありました。しかし〝やりたいと思うことにはまず挑戦〟と、あのボランティアから学んだ考えがあったので、迷わず進むことが出来ました。不安をよそに、今では沢山の年下の友人ができ、学校で学んだことを一番活かせる希望の仕事に就くことが出来ました。

たった一日の、一瞬の出来事が人の考えに影響を与えることがあります。あの日、あのボランティア活動に参加して本当によかったと思っています。私があの日体験したように、私もこれから後輩に元気やパワーを与える事のできる人になりたいと思います。

成長、そして、未来へ

ホスピタリティツーリズム専門学校
エアポートカーゴ学科　二年
金　東賢

私はなぜここにいるのかを自分自身に質問する時がある。日本への留学は、散々悩んだあげく決めたことだったが、それが正しい選択だったのかを考えることが多い。韓国で専攻した観光学を通じて学んだ日本の観光業界の素晴しさと世界経済大国二位を誇り持っている日本でなら必ず成長できると思い、日本への留学に挑戦することにした。もう卒業を目前にしている自分は入学時の自分と変わっていることに気が付いた。

初めて日本に来て日本語学校でひらがなから勉強をした記憶がまだ明らかに残っている。買い物さえ出来ず、いつも電子辞書の所持が必須だったことは昔のことでもない。そんな私が専門学校に進学し、日本人の学生と同じ教室で勉強をしていて、まして競争をしていることを考えてみれば不思議だと思う時がある。以前は言葉や知識を学びながら自然に日本で文化や生活に吸収されていく自分の姿を見ることだけが楽しかったが、今では外国での人生計画で悩む時期まで来ていた。振り返ってみれば、私は日本での二年間、今まで経験したことのない喜怒哀楽を感じた大切な時間だったと思う。専

攻の知識としては空運の国際貨物取扱士、海運の貿易実務検定そして、ビジネスマナーについてのビジネス能力検定、社会福祉のサービス介助士、コミュニケーションでの日本語能力検定などの資格の取得はもちろん、授業の実習を通じて直接体験し、知識を身に付けることができた。そしてアルバイト先での地位成長、たくさんの友達もできた。しかし、いいことばかりではなかった。健康管理をおろそかにして生まれて初めて入院したこともあり、愛している家族と友人たちと離れて外国で一人暮らしの寂しさや学校の勉強と生活費の両立の為、一日二三時間だけの睡眠などで疲れている時も多かった。

そしてある日、日本人の友達を韓国に連れていってガイドをした時だった。友達に韓国の文化や礼儀、歴史などをひとつひとつ教えている自分に驚いた。今までは日本と韓国は外見や環境まで似ていて外国だという考えはさほど感じてはいなかった。ただ、韓国より経済が進んでいる言葉だけが違う国だったと思っていたが、生活習慣や思考が全く違う国だということに遅く気がついた。まるで自分がいつの間にか、二つの違う世界どちらでも居れる存在になっていることに体が震えるほど嬉しかった。もっと新しい世界を知りたいと強く感じた。

日本に来る前は、外国に留学して言葉さえマスターすれば自分は成長することができ、成功までできるとただ単に思っていた。しかし、専門的な学習を通じて、今まで感じられなかった人生を楽しむ基準が変わった。最初は、目の前の結果だけを見て決めた留学だったが、今は新しい世界で知らなかったところを開拓していくことが楽しくなった。今回は日本、今度はアジア、将来は欧米まで翼を羽ばたいていって、世界を結ぶ衛星のような存在になりたい。この専門学校での二年間は自分の人生観を変える大きな転換点になった。

専修学校の部　佳作

私の職業観

中央工学校　3D・CAD科　一年

稲川和夫

職業とは何だろうか。その意味だけをいえば、生活のために収入を得られる場所に所属することだと思う。しかし、職業に就く目的がお金のためだけであるとは限らない。単純にその仕事が趣味だという理由で働く人もいれば、辛くても仕事にやりがいや達成感を求める人もいて、働く理由は人によって大きく変わってくる。私は、高校生の時に授業で職業体験をした。その時から、私の職業に対しての考え方は変わってきた。

私の通っていた高校では、何種類かある課題研究の中で、他の学校には無い、少し変わったことをする班があり、私はその班に入っていた。この班は、生徒が企業から仕事の依頼を受け、製品を製作していき、受注から納品までの流れを進めていくものだ。また、この課題研究で製作したものは実際

に企業で使ってもらえることや、すべてを生徒のみで進めなければならないことで、一つの企業として仕事を受ける責任と、それを達成する難しさを、より本格的に体験することができた。私はこの課題研究を通して、少しだけ仕事のやりがいというものが分かったような気がした。もちろん授業なので、お金も貰えないし、夏休みも潰れてしまったが、大変な思いをしたことで、相手側に製品を受け取ってもらえた時の喜びは大きく、力を合わせて仕事をやり遂げるという喜びを感じることができた。しかし、この時は、周りは仲の良い友人だけだったことや、学校の授業であることもあり、何も考えていなかったが、やりがいの他に職場の人達との人間関係なども、とても大切なことだと思う。

　最近では、人とコミュニケーションをとることが苦手な人が増えているようで、職場での人間関係を上手く築くことができないらしい。会社に就職すると学校とは違い、色々な年齢や性格の人と深く関わることになり、一緒に仕事をすることもあるだろう。しかし、このような時に同僚や上司とのコミュニケーションが上手くとれないようだと、仕事にも影響が出てしまう可能性がある。また、職場にいる以上は、人と付き合っていくことは避けられないことなので、苦手な相手でも付き合っていかなくてはならない。これらのことを考えると、自分の意思を伝えたり、相手の意見を聞いたりといったコミュニケーション能力は、とても重要なものだ。中でも、自分の意思を相手に伝えられるということは、とても大切なことだと思う。それは、ただ与えられた仕事をこなすのではなく、その仕事について自分なりに考え、その考えを伝えることもできる。また、自分では解決できない問題が発生した時に、素直に人にアドバイスを求めることもできるようになるからだ。私はこのことから、会社で働くにあたって最も必要なのは、コミュニケーション能力であり、自分のことを表現することのできる力なのだと考えている。そして、それは職場での経験を一つ一つ積み重ねていくことで、いつの間にか身につくものだと思う。

　私は少し前までは、職業はお金を稼ぐためのものとしか考えていなかったが、今ではそれだけではないと思っている。もちろん生活の中で、お金は必要不可欠なものだが、それとは別に、働くことによって得られるものもたくさんあるからだ。どんな仕事にも良い面もあれば嫌な面もあり、楽な仕事はない。しかし私は、それでも嫌な面から逃げずに立ち向かうことで、初めて自分自身を成長させることができるのだと思う。私にとって職業とは、自分を成長させるものだ。それは、色々な困難を乗り越え、職場での経験を積むことで、初めてその仕事のやりがいを感じることができ、自分を自立させることができると思うからだ。私は、そんなやりがいを感じられる職場で、自分に与えられる仕事に専念していきたい。

平成２２年度「作文コンクール」応募校一覧
（含・応募人数・入選者数）

東京都産業教育振興会

（中学校の部）

番号	区・市名	学校名	応募人数	入選者数
1	中央区	晴海中	5	
2	港区	御成門中	1	
3		六本木中	1	
4		高松中	1	1
5	新宿区	西戸山中	8	4
6	文京区	第六中	4	1
7		第八中	4	
8		第九中	4	
9	墨田区	両国中	10	1
10	品川区	小中一貫校目野学園	2	1
11	大田区	大森一中	3	2
12		大森六中	1	
13		南六郷中	4	
14		馬込中	6	4
15	世田谷区	用賀中	2	
16	北区	十条富士見中	7	2
17		浮間中	1	
18	荒川区	荒川三中	1	
19	板橋区	志村第一中	7	
20	練馬区	豊玉中	1	
21		石神井中	1	
22		三原台中	10	2
23		南が丘中	1	
24		開進第四中	5	
25	足立区	足立第六中	4	1
26		足立第七中	6	1
27		足立第十一中	6	
28	葛飾区	金町中	4	
29		東金町中	5	
30		堀切中	10	
31	江戸川区	小岩第四中	2	
32		鹿骨中	6	1
33	府中市	府中第二中	2	
34	私立	愛国中	7	2
３４校		中学小計	142	23

入選校数　13校

（高等学校・専修学校の部）

番号	学校名	応募人数	入選者数
1	都立忍岡高	10	1
2	都立農芸高	3	
3	都立農産高	9	2
4	都立瑞穂農芸高	10	1
5	都立農業高	9	2
6	都立中野工業高	6	2
7	都立葛西工業高	2	
8	都立科学技術高	5	
9	都立芝商業高	1	
10	都立江東商業高	10	3
11	都立第五商業高	1	1
12	都立青梅総合高	10	
13	都立町田総合高	1	
14	都立橘高	10	
15	都立八王子桑志高	6	
16	(私)蒲田女子高	10	3
17	(私)岩倉高	10	2
18	(私)愛国高	6	3
19	国際理容美容専門学校	7	
１９校	高校小計	126	20

入選校数　10校

1	東京エアトラベル・ホテル専門学校	2	
2	ホスピタリティツーリズム専門学校	6	2
3	中央工学校	10	1
4	青山製図専門学校	1	
４校	専修小計	19	3

入選校数　2校

校　種（入選校）	応募人数	入選者数
中学校　３４校(13)	142	23
高等学校等19校(10	126	20
専修学校　４校(2)	19	3
総計５７校　(25)	287	46

平成二十二年度　作文選考委員名簿　（順不同・敬称略）

東京都立江東商業高等学校長（高校・専修の部　委員長）	金城和貞
東京都立瑞穂農芸高等学校長	岡本利隆
東京都立小金井工業高等学校長	牧内利之
東京都立町田工業高等学校長	高松　清
東京都立第五商業高等学校長	中山博之
東京都立野津田高等学校長	米山泰夫
東京都立町田総合高等学校長	松井　薫
安田学園高等学校教頭	根岸宏明
京北学園白山高等学校副校長	杉原米和
国際理容美容専門学校学務課長	佐谷　肇
昭島市立清泉中学校長（中学校の部　委員長）	小谷野茂美
練馬区立上石神井中学校長	小野雅保
練馬区立豊玉第二中学校長	長南良子
板橋区立志村第一中学校長	松本洋人
八王子市立館中学校長	里吉武仁
清瀬市立清瀬第五中学校長	千野和子
新宿区立牛込第三中学校副校長	寺島京子
渋谷区立広尾中学校副校長	土居貞生
品川区立大崎中学校副校長	金児京子
北区立十条富士見中学校副校長	佐々木健一
指導部高等学校教育指導課指導主事	平柳伸幸
指導部高等学校教育指導課指導主事	山田和人
指導部高等学校教育指導課指導主事	金澤正美
指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	和田栄治
指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	山村智宏

あとがき

「明日に生きる」第二十一号をお届けいたします。会員各学校の先生方のご指導・ご協力、生徒・学生さんのご努力、選考委員の先生方のご尽力によって、ここに発行できましたことを感謝いたします。

本年度の応募作文の数は、中学校一四二編、高等学校一二六編、専修学校一九編、合計二八七編でした。昨年度に比べて中学生からの応募は減少しましたが、高校生・専修学校生からは大幅に増加し、全体で約八％多くなりました。今後とも多くの生徒・学生さんからの積極的な応募を期待いたします。

入選者の表彰式は、昨年末の十二月十七日に都庁内の会議室において本会役員・選考委員の出席を得て、多くの保護者と引率の先生方の参加の下で行われました。関係者の皆様に改めてお礼を申し上げます。

この入選作品集の編集に当たっては、人権に配慮するとともに、明らかな事実誤認を除き「原文尊重」を基本としました。誤字・脱字は直しましたが、句読点等の使い方は統一されていませんがご了承下さい。

生徒・学生さんが就業体験やボランティア体験等を通して学びえた職業観、人生観や自己の生き方をこれからの生活等に活かし、活躍することを期待します。またこの作品集が会員学校はもとより、教育関係諸機関等において広く活用されることを願っております。

明日に生きる　第二十一号

―作文コンクール入選作品集―

平成二十三年三月一日　発行

発　行　東京都産業教育振興会

〒一六三―八〇〇一　東京都新宿区西新宿二―八―一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電　話　〇三―五三二〇―六七二九
ＦＡＸ　〇三―五三八八―一七二七

印　刷　株式会社小薬印刷所